

俳句と文學の誌

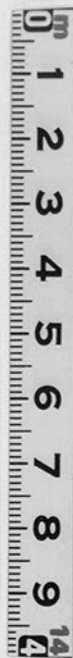
土星

2.3月合併號



土星俳句會・發行

昭和二十八年三月五日印刷・昭和二十八年三月十日發行・第五卷通刊第九十六號・毎月一回發行



俳信一束

☒大野慎氏。土星ありがたく御禮申上
ます。兎角新聞記事が多い常磐地方に
本誌の出ることは、まさに輝く土星の
如くであります。益々御発展をお祈
りいたします。

二月の節分の日

仔猫叱らなければ寒木爪散る
雀らも寒かる田の面しぐれて

(童謡新報社長 民謡作家)

☒井上甚三氏。土星現る。それは天文
學的な彼方の世界で吾々の生活に關係
のないことに考へるものがあるとした
ら矢張り自分の住む世界を孤立的に存
在可能と観る偏見と謬見であらう。
朝山先生のねむるが如き、醒めるが如
き、静かと見て動、動かと見て静、柔
なるごとく剛なるごとく猫、私の様に
單純一邊倒の座右に欲しいところ、
有りがたし。内容わからぬまゝに折に
觸れ、時に随つてべつ見す、甚だ相濟
まざる次第。以て御禮となす。

(磯原中學校長)

☒日原浩風氏。「土星」新春號御惠贈
に預り有難度う御座いました。思白主
幹の御作並に俳論大變面白く拜見致し
ました。御健勝を祈り上ます 草々

☒石田敬二氏。冠省、土星ありがたく
頂戴いたしました。益々御発展誠に慶
賀に堪えません。来る十五日は上京中
にて失禮さして頂きます。誠に残念で
すが皆様に呉れどもよろしくお禮申
上げます

(ホトギス同人)

☒内野三恵氏。大變御無沙汰してゐて
すみません、度々雑誌御惠贈にあすか
り文章や句などお送りしようと思ひ乍
ら昨年は焼失病院再建に力を入れた、
め頭がすつかりビジネスになつてしま
ひ歌だ句だといふことは凡そ遠い世界
のことになつてしまひました。本年も
まだ〳〵擴張々とやりたく俳句の方
は舊作でも整理して過去のしるしに句
集でも出さうといふところですが、た
まには用事をこしらへて御上京あつては
如何。土星お禮申上げます。いづれ寄
稿しませう。

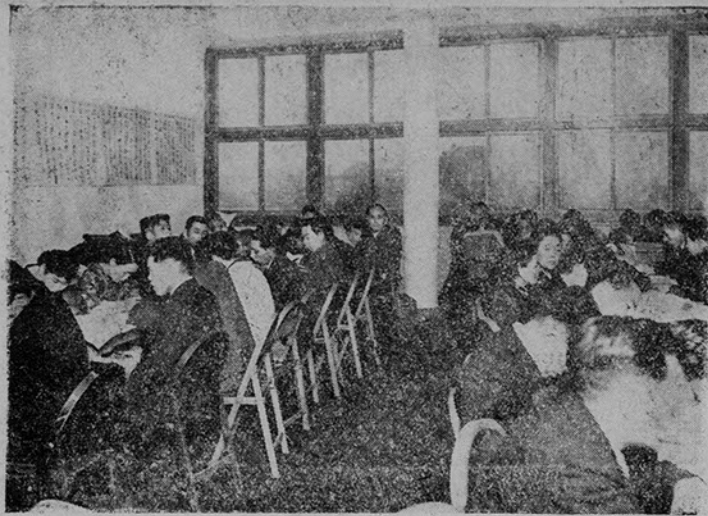
(醫博、攻大講師)

☒古茂田信男氏。この度は土星御惠贈
頂きありがたく拜見しました。愈々御
発展を念じます。地方俳壇の雄として
の貴台の発展も併せて祈ります。

(民謡評論家)

☒畑耕一氏。御誌の御寄贈有難度う存
じます。御発展を祈ります。

(作家)



土星俳句大會スナツプ

(記事参照)



高萩藤生 阿邊光恵子 石川佳郎先生 弘中雅天 思白主宰 汀羽編纂 美智子

目次

一、大會寫眞……………	3
二、自筆作品・芽立ち…大井川思白…	4
三、佐藤鶴北子追憶集	
遺句集に序す…思白…	6
遺句二百十句集	8
鶴北子さんを憶…栗野松雲…	9
鶴北子の想出…石崎流波…	10
一、寄稿作品……………	17
一、新春號讀後漫感……………内木宗八…	18
一、土星復刊號を讀んで…寺田水仙…	19
一、思白子と私……………安達道人…	21
一、閑語句集展誌……………大井川思白…	22
一、土星ノート……………安達正博…	35
一、同人作品……………	36
一、復刊記念大會記……………	40
一、土星集……………	44
一、後記……………	53
一、各地會報……………	54

題字・思白
表紙繪・佐藤玄々
カット・島春潮
高萩藤男

贊之

旦白稿

はたかゝる松野、
吾も亦いふ所の
あるを不のいれ
たるのとて、
悲もあらず。後
院の池庭に
入ると、
楓葉が
満ちたりと
聞す。
べつどの陽
まゝに松葉
の鳴き声
枯草ひた
たけり。さ
うして、
松葉の
芽生え
つやわ
かりし
は、
みれば

- 4 -

雪窩とく十法を刻る酒也酒翠

山二部小集
孫有子
芳

事
如
川
泡
列
事

肥泉、東風の試中、
 大に驚かす

いちねのたんぼ地

一

芽
立

思
白
稿

はだかる冬樹動し夜明けの空鬱金
 冬ざれや石の傳説の池底渦こしなへ
 戀も空し鐵屏看守満身もて閑す
 ベツドの陽去れば枯葉の鳴るばかり
 枯萩ひたにかざろひ架を生む

接骨木の芽立つやこうしては居れぬ
雪霽れや渚を劃る海の碧
山藪の一點孤なり躬を勞はるる
春めくや門川泡を列ね來るる
肥臭き東風の試歩中故郷戀ふる
みちのくのたんばは地に張りつき咲く

鶴北子の遺句集に序す

大井川思白

土曜句會の創立主唱者佐藤鶴北子とは生前一度も面接の機を得なかつた。従つて、彼を追悼するに際しても語べき材料を持たぬことを遺憾とする。

彼が抗研にゐた頃、大波波童（本誌昨年二月に追悼號を出す）も同病院に重篤の身を横たへてゐた。波童は二階の病棟にゐて「駒草」の傘下に「紫苑」といふ句會を牛耳り、鶴北子は階下の病棟にこれ亦た重患の身を横たへつゝも「土曜句會」を主導してゐた。二者共通の點は重症であるにも拘らず俳句に對する情熱に於て優劣がなかつたことである。然し、波童は虚子、青郎、阿部みどり女らに師事する處の、謂はゞ、花鳥諷詠派であり、鶴北子は結社臭こそなかつたがリリズムの色彩を本領としてゐたもの、如くである。

當時、在院患者三百名足らずの抗研で、階上派と階下派の二つに岐れ、互ひに反目してゐたことは注目に値する。昭和二十四年二月、この二分野がすべてを恩讐の彼方に洗ひ流して、一つの「土曜句會」に固つたやうであるが、爾來、年輪古き波童を宰領格に推し、鶴北子はその後塵に安んじた。しかし、作品の上では鶴北子に

より多くの秀れたものありと斷するのには私の癖が眼であらうか。

土曜句會々員が私の退院に際して機關誌發刊の熱望があり、それに應へて「土星」の出現を見たのであるが、鶴北子に同人としての参加協力を求めた時彼は欣然この舉に參じた。私に宛てた昭和二十六年十二月三十一日の書翰で次のことを述べてゐる。

拜復 貴信拜見しました。愈々御清祥の事と存じます。今度土曜句會が綜合俳誌として新に發足する事になりましたとの事は小生にとつて望外の喜びです。療養者中心の綜合俳誌の發行は豫て小生の希望致し居りました處であり今後喜んで協力させていただきます。當時厚生病院には阿部みどり女史の駒草支部として「紫苑」と云ふ句會がありましたが、その句傾向にあきたらなく思つてゐる進歩的句友の多い事を知り句友と語つて土曜句會と銘打ち研究的グループを創つたのでしたが、其の後熱心な方々に依つて受け繼がれ、今こうして綜合俳誌として新發足をなす基となりました事は思へば感なきを得ません。

過去、現在に於ける種々の綜合俳誌を見ますと、綜合誌の經營は種々困難の多い事と思ひますが、病者の俳誌として長く發展されますよう祈ります。小生現在には俳誌「さなみ」に據り主宰南山寺氏と共に縣俳壇の爲に微力を致し居りますが、何分にも重症の身の事として不如意の事多く残念に思つて居ります。今後どれだけ作れますか疑問ですが出来るだけ協力させていただきます。同封致しました句は今年度の作の中から冬季の句を抜いてみ

ました。大部分が既發表の句ですから此の點お赦し願ひます。

草々敬具

昭和二十六年十二月三十一日

その後三四回はど手紙を受取つたが何れも死期の近づきつゝあることを自覺しつゝ書かれてあつたと記憶する。文章も字も俳句もすべて一頭地を抜いてゐた鶴北子の筆蹟は後で計を知つた時随分搜したのだがどこかに紛れて遂に見當らず本號に載せ得ないことを痛恨事とする。

その頃——實際は歿後のだが——栗野松雲から鶴北子の消息が廣らされ「喀痰がまるで喀血の時のやうにゴボ／＼と間斷なく溢れ出て眠れない夜が続く云々」と書かれてあつたことをさかされ未問不見のこの鶴北子を眼底に想ひ描いて私は愕然とさせられた。あとで知つたことだが、この手紙は「五月二十六日付」で松雲に送られたもので五日後の三十一日に永眠したことを想へば多分は絶筆であるに相違ない。

この絶筆の中で

「氷原帯は今の私の氣持とはまるでちぐはぐだからやめました。地元の句誌で随分優遇して貰つてゐます。近頃は少し悠張つて俳句で表現出来ない事や感情過剰のものは短歌にして見たいと思ひ起ち短歌もはじめました云々」として

死ぬることばかり思ひて二三日日記に「若葉雨とのみ書く

の歌懷を漏らしてゐる。この詠首のみに拘泥すれば死期が目睫裡に迫つて來てゐることを自覺したやうにとれぬでもないが、まさかそれから五日の後に卯塔一颯の煙りにならうとは考へては居るまい。すべて人の世の別離はかくの如く無常にして迅速なものである。

更に彼はこの手紙に

五月光病めば愚に聲のぼし

の二句を添へてゐるが、以上の三詠が絶世吟となつたのである。

鶴北子が鬼籍に入つたことを私の知つたのは遙かに時を経て昨年の十一月末である。これも松雲から報ぜられたのであるが、土星は當時休刊中で追悼號を出すことが出来ず、また復刊號は新春號のため追悼號にするのもちよつと憚られて思ひ乍らも遷延してしまつた。

故人の句集出版は令兄清一氏の手によつて目下進められつゝあり、来る五月の一周年忌までに完成が目指されてゐるといふから相當量の作品群となるであらう。故に本誌では、土曜句會及び土星所掲並に八方蒐集したるもの通計一百九十四句（追憶文所掲のものを加へれば約二百十句）を敘め、一つは以て故人の供養となし他は以て同信會員の硯北指針に充てんとするものである。また生前風交のあつた諸君からは夫れ／＼追悼の文を得、更に令兄その他の書簡を加へて別掲した。

爰に些さか所懷を録して故人の冥福を禱り追悼號とする所以。同人佐藤鶴北子よ！さらば永遠に幸あれ。

（一九五三、二、二五夜舞筆）



土星 同人 佐藤鶴北子遺句集 十二句百

昭和二十四年度作品群

概年譜

- 一、鶴北子、佐藤民二は大正三年四月二十五日山形縣鶴岡市大寶寺宇大寶地一八六番地に生れた。
- 一、縣立鶴岡中學校三年を終了後、上京苦學して電機學校本科を卒業した。
- 一、逓信省電氣試験所を経て、昭和十三年天津義昌洋行に就職、同洋行が東芝に合併されると共に同社社員となり、昭和二十年休職、同二十二年退職した。
- 一、昭和十九年一月天津に於て發病、同年十一月内地に引揚げ、東京都下東村山の保生園に入院したが戦争末期の諸事情のため一旦歸郷した。同二十年仙台市抗酸菌病研究所附屬厚生病院

(三月)

春風袂のひとの身をしばる
春立つや小石を蹴りて出勤す
猫柳けふしろがねの錆びてゐし
互かへり雀に拾ふ米ありぬ
邂逅の涙に雪の街 雜 閑
鳥雲母知らぬ娘は買物に
戀ごころ春田の雨の細ければ
日に澄みて田螺の水のながごと
石屋根のあひ間あひ間の梅盛り
枕べに重き句日記春の雷
若草や山羊の乳房はバラの色
波止離別れに馴れし女凭れ
浮かれ蝶いくたびさそふ花のあり
春燈姉は未婚の書に伏し

に入院した。

- 一、同二十五年四月事情あつて餘儀なく山形市篠田病院に轉移した。
- 一、二十七年五月三十一日午前十一時三十分宿病の増殖硬化性肺結核病の爲め吾々の眼界から永遠に去つた。此の間開病生活八年五ヶ月、行年三十九歳である。

鶴北子さんを憶ふ

栗野松雲

故鶴北子さんの横顔を描けるかどうかは疑問であるが當時の薄れた記憶を辿つて臥床のまゝ断片的に書いて見ませう。私よりも石崎流波さんの方が隣室にゐた關係で多くの印象をおもちのことゝ思ひます。
歳の判りあとの青い白晢の美貌の坊主頭が良く似合つてました。轉院の時、寄せ書のノートが廻つてきましたがその中に彼の描いた水墨畫はなか／＼垢抜けがしてゐたやうです。特に支那の風俗畫に見るべきものがあつたかと思ひますが、それによつて彼は大陸にゐたのではないかと想像されます。文字も個性のある達筆家でした。

彼の作品には

蚊帳の月四肢は湖底の屍めく
夢にも似てかなしや曉の整籠
夏月夜横臥は仰臥よりさびし
夜は夜の初暑の朱き七日月

(三月)

(四月)

燈にきそふ百果は春の夜を薫り
春の夜の酒毒に痴れし眸に笑まる
その指の木蓮よりも耀やけく
海は涯なきに胡蝶よかへりこよ
春曉の汀ひた／＼魚買ひに
ベッドより口笛とばす春の雲
ふところに獨身の菓子花の雨
夕さくらすでに花街の粧へる
夢をゆくごとく揚羽に音絶えぬ
春曉の路傍けふらす自炊の火
病室の午後の倦怠蛇奏で
花冷えの射的に凝らす無爲の腕
白麻に戀しりそめし日の記憶
蛙咲笑不惑のなみだたゝ愚
醫にかよふ花の嵐にさからひつ
街央に肺病院とて鳴蛙
日は西に疲れ牡丹穢れたる
醫師の言薄暑路上にくりかへす
病衣干す新樹の枝をひき挽め
牡丹のさゆれ孤患の胸素る
胸瘦せてひたに新樹の風うまし
水をくぐ音にめざめぬ夏夕べ

の如く現實の生活に根を置きながら氏のロマンは潤滑調和の世界を形成してゐたやうです。又半面、觀念しきつてゐる句も多く、これでもなか／＼といったものもあるやうです。

腕なげて牡丹くづるゝはかはなし
演藝放浪ふや苦熱の口あけて
瘦せはてゝなは欲る命星月夜

病む故の美貌多日を掌に愛し
春の旅吾のみ病者車窓に凭れ
花咲けり息疾き胸に手を重ね

(昭和二十五年四月七日の書信から)

病者あはれ眼閉ちても花明り
昏々と病者一日の花の雨

雲流れ花咲きいそ／＼はなし

(同二十六年五月一日の書信から)

私との間には彼の轉院后(二十五年四月七日)月一回の割で俳句のことや病況の連絡交換をしてゐました。二十六年の五月彼の病状は急に悪化したのがトマイで落着いたとあるが、同八月頃にはストマイが効かず苦しんでゐます。生きてゐることだけで精一杯です。とあり同十月には、柿の甘い季節となつたことを欣んでゐたが彼は果物が好物のやうでした。句で病氣を忘れ得るやうだとよいのだが体が悪いとまるで作れなくなり、とありその點は波童さんと反對のやうでした。

彼は非常に義理固い性格の様でした。私は彼の轉院の時五十分しか話し合はなかつたのに、それ以來文通が途絶えませんでした。轉院の動機は療養法上のことかと思ひます。抗研の厚生病院はその頃宮城縣在住の者に限り醫療保護の適用を認めるといふ立前で止むなく山形の郷里近いところに轉じられたのでせう、抗研を

めざれば薄暮夕べの紙芝居
昨日の犬昨日のごとく麦夕べ
月は紙のごとし蝙蝠は鳥でなし
薫風といふ目をつむり幸思ふ
悔恨は炎暑の街を歩かする

(五月)

敗慘の身なり郭公遠く去り
かつこうかつこう犬は欠伸をして去りぬ
郭公や巷は夕べの驕音に
屍に浴衣著するは白き處女どち
涙なきにあらす夏衣の胸の波
すでに死の相郭公鳴きそめぬ

―療友の死三句―

首途せめて白き帷子深く
瘞送の白衣は麥をゆく墓標
麥の穂のさやぎに涙をささめし

(六月)

石昏れて墓は決意の一步なす
風鈴や無策の腕を枕とし
古き句誌梅雨のしゝまに讀みかさね
空腹の靴擦りくだる西日坂
夏木立悪童かくて代々育つ
夏の蝶放逸女王さながらに
籐椅子に寝たし吾子と星敷へたし
日にぬれて蜥蜴の碧汚れなし

退院するまでは空洞吸引療法を行つてゐましたがそれでゐて元氣のやうでした。夏などは散歩してゐたのを見受けました。

轉院の際の見送りは大したものでした。玄關ホールからぎつしりの人の群れで埋め盡しました。とりわけ女性の数が多く看護婦女患の見送りが半ば近かつたといふことで彼の人柄がうなづける筈です。

甚だ断片的ですが私の思ひ出されることを書いてみました。波童さんや鶴北子さんのやうな傑れた俳句先達者が次々／＼と亡くなられることは同病の宿命とは申せ限りない悲しみであります。想ひを新たに心から鶴北子さんの冥福を祈り上げます。

佐藤鶴北子の想い出

石 崎 流 波

二月八日、主幹の思白先生より『昨年の初夏、山形の病院で鶴北子氏が亡くなられ』といふ御手紙を頂き、初めて鶴北子氏の御長逝を知つた次第です。此の度の新春號には鶴北子氏の作品が何處にも見當らず、一抹の淋しさと物足りなさを味ひつゝ、本號を讀み終へたのでした。かねて同氏から、病篤しの書信を頂いてゐたことがあつたので、やはり未だ持ち直さないのであるのかと慮つてゐた矢先の訃報でした。

顧みると、鶴北子氏の入院療養の生活は、私が記憶するだけでも、十年に餘る長期の苦闘の連続でしたが、そのかひもなく空しく、遂に永眠されたことは寔に痛惜の念に耐えません。

早速、鶴北子氏からの芳書がある筈だと探して得た一葉は奇

(七月)

晩學の簞蜥蜴に逡巡す

疲れやすきこゝろ蟬の音たへがたく
かな／＼に今日の疲れの身を踴む
星祭幼き悔のよみがへる

風鈴や舌たらぬ子の獨り言

暑に呆けしレコード午をくりかへす
蟬しぐれ母亡きのちの故郷をしらす

ひまわりの凝視微熱の額に爰し

ひまわりに一日もの言ふこともなく

ひぐらしや風ふるさとの方よりす

身にうとき戀歌蟬の音きかんとす

ひぐらしやあまりに遠きくにの空

みん／＼の憎めばいよ／＼鳴きかさね

(八月)

妻あはれ雷雨の夜を子にいそぐ

唐黍を嚼みて獨りはむなしかり

豪雨去り嘘のごとくに蟬ひとつ

看病女の萩刈るはなし羨みつ

大言壯語して夏瘦せの腕を撫し

鯨の目の海のごとくに色深き

凭るれば新涼の幹背にかたき

秋夕焼高し田を來る吾子小さし

米研ぐや秋夕焼の水を／＼き

(九月)

しくも二月八日の日附でした。

拜復 御便眞になつかしく拜見。御句も拜見させて頂いて居ります。小生療養以來最悪の状態にあり、今後どれだけ作句を續けられるか心許ないのですが、かうした御激勵を頂く毎に、一句でも佳句を心掛けて居ります。作れば作る程むづかしい俳句ですが、最近漸く俳句の何たるものかおぼろげながら判つて来たやうに思います。

土星誌上愈々御活躍の程祈つてをります。

では簡単ながら一寸御返事まで。愈々御自愛の程御祈いたします。草々不

この文面は、私が土星創刊號上に、久し振りに氏の俳句を見その感想に併せて快癒を祈念した私の手紙に對する返信なのですが、今それを繰返して見て、同氏にとつても亦、大波瀾童氏と全くと、俳句が療養生活の單なるリクリエーションではなく、たとひ、そのすべてとは云へないまでも、その支柱であつた感を深くしています。

鶴北子氏と私の交渉は、昭和二十四年一月末から同年十一月月上旬にわたる私の療養期間に持たれたもので、それも、親しく言葉を交したことは兩三度に過ぎず、回覧される『紫苑』——之は土曜句會の前身ともいふべきもので、月に一度行はれる回覧句會でした。或は『土曜句會』誌上で、各自の句を忌憚なく批評し合ふといふことが主でしたし、退院後は、前記の文通が一度行はれたに過ぎません。ですから、實のところ、私には『佐藤鶴北子』を語るには、その資格があまりにも貧弱なのですから私の回想する限り同氏の一面を敢へて記して見たいと思ひます

文長し秋草燈をかたむけて

秋燈たゞに風の癡癡につゞくのみ

雨去りし裏山畑に蟲の聲

看護婦は歸途に鶏頭焰を収め

池の空ひろし鶏頭影を揺り

秋空を吹き來し風と思ひ呼吸す

郷愁の栗食ひこぼす胸の上

栗食へり紙の袋を鳴らしては

鴉の喉口笛高くゆくもよし

秋の谷はるかや子等の絶叫す

柿の實をすり／＼て死にたくなし

人の死に秋朝焼けのひろがりぬ

別れ去る人に秋雲影をひき

本能のかなしき木犀窓に捨つ

職を得ず秋日の石に籤を破く

死は難し虚脱のごとく甘藷を食ひ

鰯雲病みてひさしきわがみなる

うち仰ぐ鴉は夕日に焼かれるし

朝寒の床に薪切の音としりつ

兎の仔見んとて落葉風に吹かれ

朝寒の病廊に見し猫の貌

夕べはや來啼ける鴉よ妻來すや

碧玉の虚空がかへす鴉こだま

(十月)

私が入院した當時は、私の在院中俳句の最も感況の頃で、『紫苑』への投句者は廿數名を算へました。既に俳句を囁りかけて

ゐた私は、入院早々舊作をも混へて投稿したのでしたが、編集當番は隣室の佐藤民二という人だと教へられ、薬包紙に『鶴舞』ひつ明ひつ古刹の春めけり『日溜りに誰かたまりて満ち足りて』『安らかな寝息みとりの炭を次ぐ』の三句を認めて、『切』日の夕食後のひとときを訪れたのが、鶴北子氏との初対面なのでした。ベッドは廊下側の一番手前で、ベッドと壁が作る狭い谷間に蒲團を敷いて編物をしてゐる奥さんと、何か話をしてゐた氏の枕頭の本立には、大小の書物が山積し、俳誌をかゝげた書見器の陰には、空洞吸引療法をやつてゐるらしいガラス瓶が陳いてゐました。丸刈の頭ではあるが、豊頬とも見えない袖おちくぼんだ眼もとに、とがり氣味の顔、顔色は冴えないが眼光に精氣の漂ふ、四十年輩の風貌は、一見して、輕患ではない長期療養者を思はせました。事實、鶴北子氏は厚生病院が開設された當初から、吸引術を受けてゐられたやうでこの點は、大波瀾童氏も全様の療養歴を持つてゐた筈です。

初対面の御挨拶の後、件の薬包紙を取出して、新参者入會の辭を述べたのでした。當時、階上に波童あり、階下に鶴北子ありと謳はれ、厚生病院に於ける俳諧宗匠として君臨してゐた氏は、『あなたは新米ぢやない。日溜りに句なんかは、なか／＼の句だね』と満更お世辭でもなく云はれた眼もとが印象に残つてゐます。

たしかその翌日だつたと思ひます。鶴北子氏が長身瘦軀をひつさげて私を訪ねられました。

霜の道動めわすれし下駄足に

初雪やあげし初老の眉暗く

嗽にきらふ紅葉不眠の目が痛し

木枯の豚の悲鳴をきゝすます

意に満たぬことのみ落葉落ちつくす

病みてはやく度度の紅葉ちり果てし

さようなら／＼落葉風に舞ひ

病みていよ／＼美貌冬日を掌に愛し

佗しきは冬日の病窓の吊り鰯

暖炉の火少女の顔に童話めく

冬の星話絶ゆればうるみけり

故郷の暖炉の火色幸福に

病軀耐ゆべしや山茶花雪白に

冬ぬき庭師はまろき日を背に

退院者寒きベッドを置き去りぬ

癖酔薬恍惚と雪の夜の時計

灯りて雪の街燈つやめける

昭和二十五年年度作品群

(十二月)

猿曳や米兵笑みて鼻長く

初鵝のはるかなれども聲正し

病み古りて歌留多羨むにもあらず

小さき灯を胸にともして寒夜臥す

『あなたは、石崎南風先生の弟さんじゃないですか。顔が似て
るし、俳句もやられるから、實は私は、あなたの兄さんに俳句を
添削してもらったことがあるんです。それで想ひ出して、や
つて来たところです。』といふのです。兄は熊谷内科の醫師だ
つたし、俳句も多少やつてゐましたから、そんな盛で兄と交渉
があつたのでせう。兄の噂や、それから當然俳句の話が出まし
た。『駒草』の詠風に懐かない趣旨も洩れ出しました。當時も、
既に波童氏は、駒草俳壇で盛に活躍してゐましたが、鶴北子氏
の句は、投稿されぬせいか、駒草誌上であまり見ることにはな
かつたやうに記憶してゐます。土曜句會が生れたのはそれから間
もなくでした。その経緯は、土星創刊號に載つてゐる鶴北子
氏の書簡の一節に見られます。當時の會員で、土星誌上に見
える句友としては、大波波童、佐藤鶴北子、栗野松雲、三原禮
男の諸氏に私なのです。

この『紫苑』の互選句會で、私が伴にも、最高点を得、鶴北
子氏の隣室から、別棟の松雲氏の部屋に移つてゐた私を、賞品
をもつて訪ねて來られたのが、波童氏と私の初對面でした。
波童氏も、療養歴は長く、空洞吸引療法をやらせ、日夜病床に
待る奥さんの看護をうけ、子供さんはなく、ひたすら作句に精
進された諸點に於ては、鶴北子氏と全裸でした。たゞ、波童氏
は、俳句の他に川柳もやられ、又將棋も随分やつたやうでした
三月の或る寒い晩、病院の入口——藥局の前で、慰安映畫會
のあつた際、遅れて行つた私を『流波さん』と呼びかける聲に
振り向くと、鶴北子の元氣さうな顔が笑みを浮べてゐました。
他人の中で『流波』と呼ばれたのは、これが最初でしたし、氏

が、寒夜映畫を見に外出するなどは思ひも及ばなかつたのでし
た。

この他、鶴北子に會つたのは、私が退院する日に、挨拶に訪
れた時で、これが鶴北子の聲に接した最後となつたのでした
が、當時の氏の風貌など、残念ながら印象に止まつてをりませ
ん。

今、鶴北子氏の数多い俳句を鑑賞してみても、當時私が接して
得た印象を思い合せますと、靜謐な外殼の裡に若々しい情熱を
炎してゐる、といった性格の方であつたやうな氣がします。よ
り正確にして精密な人間像は他の方が描出されることでせう
最後に、鶴北子氏の長逝を悼み、御冥福を御祈りしまして拙
筆致します。

附記

俳號『鶴北子』の由來は、同氏が鶴岡市の北郊あたりの出身
なので、さう稱されたのではないかと愚考してをりますが、生
前、鶴北子氏から承らなかつたことを遺憾に存じます。

令兄清一氏書簡の一齣

拜啓、貴翰拜讀致しました。弟鶴北子存世中は何かと御世話に
なりましたことを深くお禮申します。このたびは又追悼號を御編
輯下さいます由御厚意の程衷心感謝致してをります。
このことにつきましましては二、三日前仙台的の佐藤芳夫氏よりも御
便りを戴き、御皆々様の御厚意に有難く存じてをります。經歷
等簡單ながら申し上げます。
次に遺句遺稿の詳細をとの御申越でありますが實は小生も弟の

齒科醫として小さき洋間に燐燐燃やし
冬の日に眼鏡かざして齒科醫暇

葬列縷々雪嶺を畏れつゝゆけり
月凍てゝビルは死山のごとさびし

吹き晴れて出羽の雪嶺々藍深き
露こむる疎林の冬歌ありとのみ

狩らるゝや大嚴寒の地に縋り
更けし夜の吾子の小窓も雪積むや

灯ともしてこゝろなごめり虎落笛
いと小さきラジオ深雪の夜を鳴らし

ベッドより子の霜焼の手を握る
六歳の吾子が負ひきし林檎とや

北風鳴りて父情切なき二夜三夜
枯れ烟をよぎりて友の大股に

生きて夜の厠にかよふ腥寒し
立春の梢の高きにめくらみぬ

熱憂しや二月の空に煙流し
かへり來し手に殘照の猫やなき

早春のけむりは太き小煙突
連はしり病者は春の歌忘る

行く雁や嗜慾乏しき箸を手に
梅咲くや出でしことなき療舎の門

治られぬ身に春の風あふれきぬ

春の風かくあまければ胸疼し
春淺き白衣に風のやゝあらく

春雲や子のゆくすえを吾は知らず
啓蟄や己のが足もて地に立てる

春眠の午きりもなき天理の鼓
春曉の牛のつやゝかに駈け出でぬ

コーラスは子等滿載の東風の馬車
春の旅吾のみ病者車窓に凭れ

山の子の歡喜がとばす露の蓋
入院の少女よ暑し雨來るらし

子の畫きし母よ妻の笑ひやます
春夜電話妻と百里の聲交す

梅雨の夜の金魚ざらりと身を垂るゝ
金魚玉の金魚よ呼吸切なし

梅雨茸の何か不安の頭をつらね
母つづす妻の手戀へり母の前

梅雨明けて笑ひ去りゆく女學生

昭和二十六年度以降の作品

白き蝶天より降りて少女の死
少女の死蝶は喪章として垂れよ

痰を吐く貌で見えてゐる初蝶なり
昏々と病者一日の花の雨

(次頁上段へ)

(二月)

(三月)

(四月・七月)

寄稿作品

双 眼 鏡

(丹頂)

齋 藤 青 火

枯野来て乗る煙々の燈の汽車に
亡父の手袋大き枯野を來し母に
旅の双眼鏡にうつす冬港夕やけ來
旅籠寒し階下の鳩時計啼けば
落花生齒む女工のひとり泣きはくろ
ぶどうの皿眞白しやかな雲窓に

雑 唱

(いはら)

植 田 千 鳥 子

落椿大地の無疵陽にひろふ
目じるしへ流る、椿足たのし
早梅へ嫉妬つものりし陽のほぐれ
春光へ巨大の一步影明し
芝焼ける潮の夕日を浴びつくす
重壓もなく芝生より歌わけり
大地萌ゆ我が本能のほどばしる
早春の目と目大海抱さるる
大學の髯からかはれ芝ぬくし
頭上の木眩し青光あふれけり

近 詠

(春燈) 新 城 世 燕

冬木影とらへて土はからび居り
夜の空風を封じて凍てにけり
枝靜かなるとき月も凍てにけり
吹雪やみ木の静けさを月が占む
雪つけて日のしづかなる枯木かな
竹の雪ゆれて夜明けの近づけり
冬の日の射し來て消えてしまひけり
水仙に臘をあづけたる注射かな
雪もてる枝に日ざしはとどめざる
身を寄せる幹だにもなき吹雪かな

俸 給 日

(あさみ)

山 下 率 賓 子

春埃いく日吹きたる道ならむ
春埃哀しにはひの古土間は
チヨコレートかくわし寒灯下の椅子よ
冬田中あらはに白し夜行けば
たくあん黄なる辨當の俸給日
砂利探の憩ひ草の座暖かに
泣いて／＼椿の白にふれし唇や
一たんは乾きし雪野ゆる新らし

第 二 信

句集を出版の予定で昨年暮あたりから整理にとりかゝつておりますが俳句については全くの門外漢であり、又勤務の餘暇にやつてをりますことゝなな／＼進捗致しません。おそくも本年五月の一周忌までには完成の心組みではをります、今直ちに遺句を取まとめ御覽願ふ譯にはゆかぬことを遺憾に存じます。追悼號を刊を先に延ばして載ければ句集出來次第お送り申上げることゝ致したいと存じますし、又御都合もあることゝすれば貴誌に發表さして戴いたものから適宜御採用願ひたいと存じ上げます。以下畧

(前頁下段より續く)

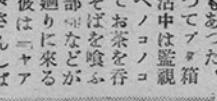
病者あはれ眼閉ぢても花明り
梅雨の雲支へきれざる胸の汗
泣き濡るゝには髭長し梅雨の蝶
錢かぞふる貌ごきぶりに見られしや
血を咯くや眞夜も眠らぬ金魚の目
梅雨個室いくたり死にし壁の戲畫

片虹や記憶はなべて悔に満つ
根なし虹病者の夢のたゞ美しく
菊眩し兵士のごとく蜂とまらせ
柿食へりわらべのごとく口濡らし
子を待つや夕焼色の柿を掌に
百舌鳥よわが熱高き日は遠啼くや
生き繼ぎて落葉見しとて文交す
はるかなる櫻落葉の徑戀へり
肉煮ゆるたのしきや北風鳴ればなほ
熱き目を開らければ枯木ばかりの窓
風も枯色病衣ばかりが絆をちらし
めつむれば紅き眼なうら冬日満つ
熱去らず冬日は遠く炎えて過ぐ
かゝやき降れる雪に心を洗ふべく
一日人を戀ひをり雪となり昏るゝ
計のごとく鴉きしより寒の相
つひに雪一日からすに騒がれて
風雪や夜も泣きゆく撥送車
限りもなく降りつぐ雪を見て睡むし
かくしげき暮雪は遠き日も降れり
(昭和二十七年四月號土星所載)

きりしに麥播く海に投げるが如
これはまた何と前者に較べて放膽な句でしよう。それでい
て結まるところは Chancen と締つてゐる。流石老練な作家でな
くは出来ぬ藝當です。投げるが如くが効いてゐます。
夕映えに柿みづからの朱けを染む
陶工柿右工門の故事を思い出させて呉れました。一言にし
てつくれば絢爛たる作品です。柿みづからと云う表現はなか
くうまく止まりつゝいます。
耕牛の云まり尿すりす耕夫も亦
とほけたような句で何となく心が温つて來ます。始めは説
明で後は説明ではない連續となつてゐる。接ぎ穂がなか／＼六ヶ敷し
のだから字を書き居て陰囊握り占む
先のきざししの句とはまた角度の變つた大膽不敵な作品だ
れども相手を表現し得たもの。これまたの大膽な表現は一寸
誰れにも出来なかつた。それでいて少しのやらしめ感じは
させないのから、灰に字を書き居ては氣分をソツチの方に轉換
骸を眞似て作り、作者私の恐れるのはヒツカ、土星の會員がその形
と云うことだ。
鼻梁さむく眼覺めて今朝も生きてゐる
何の言あげすこともなく無條件に特選として頂いた作品
である。感受性の極めて強しとて極めて安定感のする作品
だ。これが思ひの眞骨頂とでも言つて置こう。そして土星會
員は此の作品に右へなす火鉢を抱く
失意の酒飯臭味のたれた生活俳句だ。陰惨な場面を激越
所謂生活俳句臭味のたれた生活俳句は作り得ないとする盲者へ
の言葉で表現せなければ生活俳句は作り得ないとする盲者へ
元來花鳥詠派の私として常に其の上に主觀のにじみ出る
作品を欲しいと思つた私のみにとつて茲に頂いたのは此の私
の氣持にピッタリとしたもののみでして、
次に同人作品欄に目を通すに及んで、これでは主宰者泣か
せであるわいと思つたのは、同人作品欄と云う特別席に祭り

大井川思白子(幸盛)先生はどんな人か知
 らせてくれ、と云ふ間が相當なるものでは
 の方々への返信の意味で書いて見る。「同
 人月旦欄」で私の事を書いた筆力と湯學さ
 て大約の人格はわかると思ふ、彼と私の關
 係は、同人月旦にもある通りだが、字名主の
 私にすつかりチャームされてか、フツツ
 と私の監房を訪れたのが惡縁の始まり。惡
 口の言ひ比べをやつてお互に嗤笑すると云
 つた仲、忠告すれば素直に反省する思白子
 であつた。

かつてア箱
 生活中は監視
 室へノコノコ
 出てお茶を呑
 むそばを喰ふ
 警部^ニなどが
 見廻りに來る
 と彼は「ヤア
 何々さんしば
 らく」などと、友人に話しかけるような圖
 太さで少しも驚かなかつた。或日彼は監房
 内で朗々と詩吟をうなり出した。監視巡査
 がカンカンに怒つて「是所をやるとは思ふ
 か!!地獄の一丁目だぞ!!詩吟をやるとは何
 事だ」と叱りつけた。彼の顔は見るよしも
 なかつたが、おそらく彼の事だからシヤア
 ンがばり通した男なのだ。もつとも彼は二
 十八才で市會議員までやつてゐるのだから



私と白子思

安達道人

昭和二十六年一月二十四日付仙台厚生病院より留守宅への書信

「平の留守宅への賀状、それからこちらへの御手紙、また昨日はハガキなどその都度兄の思ひやう深い、温い、友の情に對して誤りも程有難く思つてゐたが實は一月二日に大略書をやり、また新しい一錢銅貨大の空溜を右肺上葉にこしらへてやつた、それだけなら葉書一枚位は書けたが略書の四日目に氣胸をやつて自然氣胸を起しすでに死ぬ處だつたが辛ふじて脱氣が出来、やぐ助かつた」と云ふ手紙が來た。彼は氣がよくないかと半年も手紙をくれなかつたが此手紙で私は彼はまださ肺病に？と少なからず驚き且つ落膽した。

仙台抗研を退院した後は同病の人々を慰めると云つて佛託土星を發刊した。私は佛託を出す？と云ふから二號で終るようになるから出すなと云つたがきく得て貰ひなかつた。此度は彼もやゝ小康を得て費り喰ひも底をつきさうだと再び炭礦事業を始めようか、か經濟的に悩まへ、なんとかやつてゆかれるものになつたと思ふ、土星の復刊したるもそのためだと思ふ、しかし一回出した五万円ほどの出払と聞いては一寸驚く個人で毎月五万円の出払を以て生きて行くものではなない。なんとか土星を繼續させて彼の個人負債を少くしてやりたいものだ。思はずと私の話とはどの位の紙数を以て終るかは？ではないが彼の一面觀をちよつと

一九五三年二月八日

獄中日記

閑語句集塵誌

大井川 思白



はしがき

文藝春秋の増刊「獄邊語本」には重光葵氏の『續・集鴨日記』といふ特別贈物がある。ブリズン心機はアリズン生活をしたものにとつてひどく感銘深い。

私にも相當量のブリズン日記『閑語句集塵誌』―監獄囚人誌―があるホンの一駒五、六十枚は書家の佐々木秀峰君にネタラれて一九四六年の書道雑誌「白鶴」の創刊號に掲載した。これ以外は僅底深く藏してゐたが長女のちか子が共立女子に入ると間もなく引ッ張り出して學友の間に見せてゐたらしい。これがために一部が散佚して行方不明となつてしまつた。

日記といふものは發表せんがためのもではないだけに一切が向き出して何の隠蔽もない。それだけ自己暴露的で人には見せたくない部分が多い。また、登場する人物にも存命中のものが多く、その人の名譽や信用を毀つやうな箇所もなくはない。よつて極端にさし障りのあるものは削除し、或ひはその人名を伏せ字とした、そのや

うな意味でもこの種の文獻は記述者の歿後に發表されべきものかも知れない。しかし、絶對安靜を守つて本復の悲願を賭ける療養生活者と、一切の自由を奪はれた囚人のブリズン生活者とは一脈共通の心境がある。面映ゆく樂つたい嫌ひはあるが、そんなことを付度して發表してみることにした。

尙ほ本稿は一九三八年（昭和十三年）のもので新年法令でいふと私の二十九才の記録である。いまこれを粗讀するに、未熟稚見、忸怩反辭の感はあるが、加筆訂正したのでは作爲がましくなるので素稿のまま發表する。

治罪法違反の被告として、當時の軍閥ファッショ政府の壓制に對する憤激は言外のものであつて、文字といふ表現力で到底書き盡せるものではなかつた。だが文字を以て眞實に近いものを書けたにしてもそれが發覺すれば心證を書して刑の量定は重くなることを覺悟しなければならぬ。以下發表する日記も、萬一の露顯に備へて証憑どられぬやうにとのふくみもあつて模倣然たる筆致となつたことは止むを得ない。

この日記の原本は四、六版大の原稿用紙である。それといふのは四、六版輸入の書籍を妻に差入れさせ、この原稿を書籍と均しい厚味に綴じ、更に書籍の表紙を外づけて擬装した上で囑に詰める。これを監視室に設へてある私物入の箱棚に他の宅下品―差入の本や衣類などで不要のものを家人の手に戻すことを云ふ―と共に叩き込んで置く、役人と雖も人間である。長く留置されてゐるうちには人情もつたり、個人的には好意を寄せ、悦服もし、尊敬する巡査もあり地獄の沙汰も何とやらで、ひとりこの日記のみならず諸多の原稿が次ぎ／＼と悉く家人の手に渡された譯である。

敗戦後は獄内執筆も、亦たこれを持ち歸ることも公然許容されてゐることだらうが、特高警察、ファッショ政府の恐怖政治下に在つてはこのやうなこともなまなかの業ではない。

この日づきの日記が重光氏の集鴨日記に刺戟されて公開する譯だが、療養吟友や會員諸君に迎へられるとならば欣んで續載するであらう。

一言、はしがきを附しておく。

(一九五三、II、IO)

昭和十三年

五月二日

朝六時××書伯の出迎へがあつて出獄、出獄しても門三寸を出れば再び福鳥署のフタ箱に留置されることが予想されたので、はるばる出迎へに来ることは見合はすべしと妻に書き送り、かば、××書伯代つて来りしものゝ如し。

案に違はず、刑務所の敷めしい黒門の外には特高の磯目部長その

他二名が「御苦勞さんでした」とか御世辭を吐して待機す。身の廻りのものは彼等のもつて來たダクシーに委せ、呆ッ氣なく運ばれるよりも外氣に觸れ風煙を愛でゝ徒歩す。スパイ等風從す。春の風物は懐しく且つ稀らしく眼福を満たす。暴風爽やかに歩脚太だ輕し下獄の頃、物凄き猛雪と打續く寒威とは岩代の風景を惜伏せしめて暗濤荒寥たりし。然るに一雨二雨來つて雪魔去り寒波遠はのき温色頼みに晴蕩す。櫻に開落の風情を聞けば彌生の空に綠樹繁り暫し發軔の身を忘れしむ。

荒寥より萌蘇へ！赤綿入―獄衣―よりセルへ、然れども肚子一たび釋放さるゝも故山に歸れず再び留置場に戻るとは。胸中の傷心野し難く、ファッショ日本に生を享けし不幸を痛歎す、臉に泪を生じ泪に老母、岳父の顔浮び、憂邑に美質の失へる妻の顔顯じ背丈けの伸びたるちか子の面影等交々心頭を去來す。

留置場に入る前、圖書館食堂にて酒三本、胡麻おはき二冊、豆腐二丁を平らぐ。出獄せる者古來豆腐を喰ふ慣ひあり、業を抜ひて六根清淨するの謂ひならん。われこれを喰ひて苦笑を漏らす。久方振りに留置場に戻れば監視の巡査ら半名主歸る！とて頗る歡待す。談論風發遂に一睡を執らず曉空に對す。

永き日や籠から籠へ鳥賣られ

春愁の獄舎變はりし壁の影

五月八日

神經痛の疼づき甚だ不快、脚の感じ鈍くしてわがものと思はれず一茶ならずも「鐵釘」の如き脚に閉口す。

「目安我樂念佛誦考」の稿昨日より起早し四十六枚を以て今

朝完結す。鎖鋼の身なれば資料を得るに由なく亦一冊の年表として用意を缺き、爲に祐天和尙の生歿年月日不詳なるを遺憾とす。

午下り金魚賣りの聲聴きこゆ。房内に爪立ちて仰げば銀杏の新緑天に伸し飛燕風を受けて斜めに翔る。三春の帷降りて初夏の氣頗りに盡く如し。一朝事去つて壯圖差ふ、此の間誰れか解かん不遇の身、手を袖にして獨居脾肉を歎ず乎。

今宵窓を隔て、蛙吹をきく、都心にありてこれを聴く、いづれの處にか水邊あるを知らざるも老翁の情緒深し。浩歌胸を押へて大息す。宵想ふちか子のこと、眼底常に徘徊する影あり我れ妻子を想へば妻子また我れを想ふ切ならむも想ふにのみ停る。

夜十一時より「國文故事熱語集」の稿を續け、ア行の部終りカ行の起草にかゝる。この稿完結する迄には定めし龍大とならん。身境如何になるやも計り知れざれば放免されぬ限り中絶未稿となるべし。想ふに、些さか暴挙のそしり免れ難し。

(註)「自安我樂念佛考」とは磐城名物ジャンガ念佛の起源が朝鮮の舞踊形式であること、また京都のロクサイ念佛も同じ形式であること、按ずるにジャンガ念佛の始祖祐天上人が明國亡命の僧朱舜水に師事したることあり、朱舜水が清國の粟(ぞく)を食まずとて日本に亡命の途朝鮮にて會得せし孟蘭盆舞踊を祐天に示し、祐天之これに六字唱名を綴り込みて淨土白旗派布教の具に供したるべしとの私稿考證の一篇である。出獄後昭和十五年の磐城新聞に發表す。

五月十一日

刑務所より留置場に移つて以來外出の機なかりしが今朝検事局より

検事局よりの歸途西澤書店に寄る。人類學雜誌、考古學雜誌を注文す。家郷の愛兒に繪本を買うて郵送し父の微意を傳ふ。裁判所への途上數坪に蟻まる藤棚あり、今や満開の花身漫たり。藤棚の下涼み台に胡座敷きて憩席を設く。橙を抜いてラムネを立ち飲みす。酒石酸味覺を刺し初夏の季感を堪能す。

五月十五日

日曜なり、心なしか房内常よりも閑寂、雀籠喧々の好日なり。

妻より發送したる管の藏額今以て未著の由、金券十五円を封入して便あり、昨年来妻に苦勞のかけ續けにて面目なし。曾て相當世話せし輩もかゝる時は寄りつかず、只管難の身に及ぶを慮れてか余の姿を見ても横丁に外れ行くが習ひなり。斯る敗鋼の身となりて妻の有難さを泌々とする。娑婆に在りては年ゆかず思慮淺しとて妻に不満を抱きしことも數々なりき。而して時に争ふことあり、還た氣を養はんとして轉地外泊することあり。今更相離れて俱に與にその身を案ず。而かも妻の絶えざる心遣り、折々の慰めの言づれに接しては焉ぞ情なしとせんや。嘗て妻の余に反逆せしはその罪余にあり、妻をして良々卑屈ならしめたる罪余の負ふべき處ならん。

富嶺は登りて偉大なるを思はず、猿呌して倍々その神容を識る。人も亦然らん。日夕相對せば倦怠の氣共に感じ兩者各々その短を責めてその長を探らず、是に不和の胚子を藏す。今や流離轉蓬の身となり妻をいとしと爲す。妻も亦然らん。愛妻の頌字を列ね謝意を記す矣。

晩食後「龍門寺開山青岑和尚傳」の譯成る。鼻の「磐城世系」と

り呼出あり。正午より暑を發足す。仰げば山樹風に揺つられて緑波の如く、滿目の眺望は濃緑の一片と化す。路傍の八百屋には獨活、蕨、豌豆、胡瓜など並べられ晩春の野圃さこそ見事ならめとぞ想ふ。因て胡瓜數本を購め歸房の夕膳に供す。

伊藤檢事調書を取るに當り、余を運行せる特高のNに對ひて『先日大井川君を調べる時、僕はチェリーを十箱ほど買つてその都度吸はせた。これは本人がひどく煙草が好きだといふので好意から提供したのだが、あとで刑務所の戒護主任とかいふ人が来て煙草を吸はせないでくれと抗議された。他分は連行の看守が上司に報告したためと思ふ。僕は囚人が煙草を吸つていけないことを知らなかつた。今度本人は一刑を果して身柄が再び警察に戻り現在被疑者である。あの時のチェリーはまだこの通り残つてゐるのだが本人に與へてもよいか』

といふ。Nは笑つて『吸つてはならぬことにはなつてゐますが、時々ハア!』と答へしかば一舉に三箱ほど吸ふ。この檢事會で長崎にて四、一大事件の被告を取扱ひしことありとて當時のことを語る。何か個人的に衷情あらば腹藏なく申出でよ、とて若干快言あるものゝ如し。メモを採る五指常に震ふ、大酒家なん。

本日、X×衛伯來りたる由、著更への衣類の外、「美の國」近刊三冊を添へて届けたり。二月號に村雲大接子の磯部草丘評あり、なか／＼面白し。

夜半より「磐城誌料叢書」の國譯に手を染む。この寫本は勿來文庫の諸様一君編するものなるも内容誤寫多し譯に苦しむこと頗し

五月十二日

云ひこの和尚傳と云ひ殆ど潤色して所謂傳説の域を脱せず。按ふに道教の影響大いにありと覺し。たゞ有興の点は龍門寺の開山が足利時代に始まることなり。東奥の洞窟は蓋し龍門寺を濫觴と言ふも大過なからん。但し好間村龍ヶ澤内の草の草堂を以て開山とすればのことなり。

五月十六日

夜來の颶風収まらず、一昨日の霜害異變に加ふるこの風害を重ぬ、縣下養蠶の損害は五百万なりと、妻の實家も定めし霜害にて春蠶不能ならん。

検事局の歸途、路傍にて衛伯夫人に逢ふ。妊娠中の由腹便々たるも平在任の住時よりひどく瘦れて見ゆ。無名畫家の炊きや想ふべし「龍門寺青岑和尚傳」「同寺八景引」今夜を以て完譯す。

數日來、執筆書淫續きて熟睡を斷らず、且つ拘置房内の電光暗く眼蓋く疼む。

五月二十日

例によつて検事局行、受刑中刑務所の車で検事局通ひをはじめてから取調べの延日數は五十日となる。伊藤檢事本日より復寫聽取書の記録をはじむ。前回までは余の申立て通り一言一句強制することなくメモを取りしが愈々仕上げにかゝる模様。藥袋特高課長調べ室の隣室に居り余の起訴條件を鞏固化せんが爲の進言頻りなるが如し。

調べを受けることは憂鬱だが、この爲に署から検事局まで數日間徒歩して外氣に觸れられることは晴々しい氣持だ。娑婆に居れば次から次と際限もなく慾望が起きて飽くるところがない。けれども、

ひと度ア箱の監禁生活になると時刻の間でも世服の中にありたき焦燥に驅られる。人間群のゴツタ返す中にそれらの休息を喫きたき思念が強く起る。昨日今日のやうに検事局までの短い路程の往復でも人並みに歩けるといふだけで一種の隨喜に満つ。こんな小さな自由さへ歡喜に價へるといふことは、社會生活に於て「自由」が人權の最たるものであることを痛感する。然るに今日の帝國主義日本は明治憲法を空文化し、國民から一切の政治的自由を剝奪してゐる。言論、出版、集會、結社、上映のすべてが檢閲と監官の下に置れてゐる。萬般の二百年の平和は蓋し世界史中の壓巻であるが人を拘束する法制が布れなかつたが故にこそこの平和がよく保たれたのである。退却は「板垣死すとも自由は死せず」と唱いたが人類の滅びぬ限り自由は斷じて亡びない、亡びるのは自由なき國家である。檢束者は「翌日の日没を越ゆることを得ず」と法文に定め乍ら吾々の如く二年越しに檢束されてゐる者が全國に一千餘名もゐる。昭和の初期迄は檢束した翌夕に警察の門のあたりまで一旦は釋放し、再び檢束して留置といふ義理固さ？もあつたが近頃の檢束縛では「更新」と書き込んで長期は四年も檢束されてゐる者がある。鳥渡うしるを向いただけでも舉動不審で檢束出来るやうな警察國家日本の如きはキツカケさえあれば必ず減ひるに違ひない。

夏いよ／＼近からんとして街角が緑り濃く、娘達は暮春を惜んで街に色彩を散らし、夫婦の乞食は稻荷公園の神樂殿で風をとつてゐるが、余の眼には彼等が甲乙なく共に幸福さうである。先哲は御し難い俗衆に愛情をつかして人跡未踏の深山に卜居し、所謂「羽化登仙」の孤獨生活に入つてしまふのが妙くなかつた。今日は社會條件を異にするのでこれと軌を一にした隱遁は不可能だとしても隱棲的な生活形式を探る人もなくはない。余なども言ふなれば

隱逸踏跡的な性格で、俗世間の先輩の金儲けの話、人の風評など紛々たる話に巻込まれることは大嫌ひである。縱令、囊中に錢無しと雖も尚ほ心に綽然たる裕りをもつて風趣を談じ讀致を弄ぶ相手なら兎も角、一にも二にも金の騒ぎばかりしてゐる世衆はうとましく思ふ。然し乍ら隱棲も長期に亘ればなまなか堪えられぬものではない。願れば刑務所生活も今は懐しい思ひ出とさへなりつゝある。こゝの獨房生活は一面參禪的で自分を見定め且つ放縱を耐ふる修養道場かも知れぬが、これとて氣紛れな一時の出来心で、一ヶ月も居れば籠の鳥が天空を翺々する如く婆娑への歸心勃々と湧くは必定だ。

要するに隱棲が好きだなど老成ぶつたことを吐してゐたのも氣儘なタラ事で今は唯々自由でありたい一念以外にはない。近代の道學者は社會人に反省を求め修養を説き發端今日より甚だしきはなしと云ふ。放恣奔逸を戒めるといふ點に道學居士の視角はあるのだらうがこれを實行する爲には個々の意志が強く抑制し得てのみそれは達成されるものである。故に彼に言はしむれば余などは自制力に缺けてゐると道破するだらう。然し、實際に於てマカニズム化した近代生活に於て先哲や道學者の諸説の如く、果して己れに克己れを抑へ得るであらうか。而してその強制された處のどんな逆境の中にも順應し且つ満足し得る精神を培へるだらうか。すべては否！である。

老莊のイデオロギイは大乗であり孔孟の教えは小乗であるとも謂はれる。老子は、大聖は市井に隱し小哲は山谷に隱するといふ彼の文教に従へば、山谷に隱するものゝみが小乘的で市井衆庶と共にあるものが大乘精神であるとの解釋が成り立つけれども、老莊の人生觀が山谷隱棲派よりも徹してゐると一概には云へぬ。理屈はどちらにもつく、人間は所謂人間であつて世俗との縁の斷ち難いものである。その人間味の本能的な心緒を表白した二つの見解がある

までいゝある。人間味の表白といふ言葉に語弊があるならば、世俗と絶ち難い人間の心性を「市井に在す」といふ言葉の中に裏打されてゐると訂正しておいてもよい。

人成ひは言ふかも知れない。彼奴は孤獨の生活に敗けて老莊精神を歪曲したと。余をかくの如く難詰する者があるとすれば、その人を尊敬することに躊躇しないが、同時にその人自ら孤獨生活——山谷隱棲なり留置場なり半年を経て後ち垂示を仰がんのみ。

内密に買つて貰つた(註)ブランドンが效きはじめて書くことが支離滅裂となつてきたけれども、弱冠にしてブタ箱の飯を食ひ初め兩來釣る瓶打の檢束拘禁を体験してきた余は一般人よりも逆境や苦痛には強い抗性をもつてゐるだけ孤獨生活にも強い耐性があると思つてゐた。然しこれも主觀上の錯覺で人々のそれに比べて劣るとも優らないのであらうか。酔ふて考へれば益々混沌して己れを見失つたらしい。要は孤獨といふものが血の通つた人間にとつて最大の寂しさであることを言ひたい迄である。

人間は文化程度が進むに伴い單純な生活に倦き足らなくなるし自我が確立して自負も強まれば自由をも愛する。背て文化人ならずとも正方形石室の幾何學線——ブタ箱といふ生活は誰人でも遺る類に違ひない。それは自由でないと同時に恐るべき單調の深刻さに迫られるからだ。當り前の社會生活をしてゐれば、時に折に倦意が鎌首を擡げる。人間は誰れでも生活に疲れたり飽きたれば「山の湯さ入つてせいせいして見てえ」ところの隱逸性を藏してゐる。ブルジョアには別荘があつてそれが叶へられてゐながら、更によりよき隱逸を求めて旅行に出で發つが如く、生活の多變、屈折を人間は欲する。けれどもさてその孤獨な生活を躬ら行つてみれば二、三日で孤獨感に敗れ我が家が戀しくなる。女房の顔をみるのも嫌だと思つて家

を飛び出した管なのに歸愁坐ろに女房が戀しうなる、搦みつかれて五月蟬いと思つた子供達をかき抱きたくもなる、人間のゴツタ返す休息を喫いで見たい氣持になる。そうして歸つてみれば再び孤獨の夢が育ち孤獨の生活が懐かしまれるのだ。畢竟、どちらにも徹し切れない彷徨の姿こそ眞實の人間の姿であるのだらう。余は昨年十月に檢束されて以來その越し方を振り返つて見た。昭和八年十月に檢束されたのは十月の上流で、稻の穂に黄金の波が漂ふゆ樨の實に朱を萌さし初めた頃である。とやからするうちに稻は刈られ野山の木立ちは落葉した、慌しい秋の足どりを平暑のブタ箱の窓から眺めて落葉たる秋葉に耳をかたむけ乍ら身の非遇を歎歎せずにはゐられなかつた。かくて、平刑務所未決へ一時はすでに多意が動いて虫聲哀へ獄庭は穢に殘菊の影をためてゐた。十二月六日の判決と共に保釋がきいたのも束の間、所謂二一五事件の全國一齊檢束があり再び平警察のブタ箱へ、更にその翌々十七日には福島縣警察部に護送されて越年。晝なほ一燈を點じたこの客に訪れるものは天窓から吹き込む粉雪ぐらゐである。支那事變が擴大長期化する以上吾々の留置も當然長期化するをことを予見して、陸軍刑法違反の禁錮三ヶ月判決に對する控訴を取下げ、どうせブタ箱に居た儘で置かれるのなら三ヶ月の分を受刑しておいた方が先々に行つてそれだけ早く出られるとの予見をもち二月二日に下獄した。五月二日に出獄するとその門前から再びブタ箱へ、と懐しい去年今年ではある。爰に至れば誰れか自由の天地を望まざるものあらんやだ。

(註) Tといふボリスは當時頗る私に悦服し、當番監視の勤務中でも酒買ひをやつてくれた。この日も彼は日輪といふカフェーに行つてブランドンを譲り受けコッソリ室内に入れた。突れた。

最近五、六日に亘り晝は檢事局通ひ、夜は耽讀、餘暇を諸研究の

執筆に向けて碌な睡眠を執らぬため眠くて叶はぬ。肝腎な検事の取調中睡魔に襲はれ、一寸油断すればコクリ／＼と半假の夢路を辿り勝ちなのは閉口した。供述の片言隻語が謂はれ起訴か否かの運命を決定するといふ重要な場で眠くするのはからうかしてゐる。

余の取調べも大要は終つたらしく思ふ。來たるものは裁断されるものである。如何に處理されるかは彼等の裁量にあるが、検事や警察官だけは親類のはづれにも持ちたくない。今度の取調べで加藤勘十の腰が以外に弱く、くだらぬことを供述してゐるのは實に怪しからん。全國の被告を不利にする申立てでをかしな男である。

五月二十二日

橋本一の「上代國文學の研究」を讀む。著者は紀、記。古語拾遺大藏等に記載する古語を究明し、これら各書に古語を統計的に計算し極めて精密な考証を試む。多々味ふべき点あり。

午前十時より頭暈あり、依つて丁に肩の凝らぬ贈物を買はせしに三洋堂より『八間見物』松崎天民著なる古本を買ひ來る。彼曾て朝日の記者と記憶す。同書の内容は主に温泉街の花柳明暗を探りたるものなり。一瞥まことに興乏し。コク更になし。

妻よりおとづれあり、蒲團の件につき届かざるとは奇怪なれば念の爲めとて發達の受取書を封入し來れり。然るに、問題の蒲團は妻の書簡より一時間先んじて特高より届けを受く。言ふまでもなく、スバイラフトンを開きて中味を檢ためフトン屋に出して鏡ひ直しさせたに相違なし。この間十餘日を經たべし。斯る折柄妻よりの書翰に接し檢閲の後何喰はぬ顔してフトンを届けたるものならぬ。豫て入浴を申し出でし件本日許可あり。午後八時〇〇巡査に伴はれ銭湯に行き出獄以來の垢を洗ふ。蓋し被檢以來はじめて福島の夜景を打ち眺む。白日下には姿へし如きこの街も夜情はまた格別の趣

きあり。ネオンの明滅に東京を想ふ。点々する色里の紅燈街を繞ひ行けば脂粉の香鼻を衝く、久しく催春の匂ひを嗅がざれば嗅覺犬の如し。細腰の艶妓は遊子の來るを得つ態なり、植込みの奥より鼓歌騰沸し飛石に水打たれて燈籠の灯影を宿す。賑を送り春暮れて爰に半歳、侍妓舞姫に對せず禪定戒を守る僧の如し。いま此の雅情に接し往年の遊意勃然として起るも發鋼の身や奈何せん。連、英、

五月二十二日

日曜快陽なり。四圍靜かにして林の如し。留置場のバルコニーに夜具を晒す。また時余に亘りて日光浴を爲す。

屋上より市街を俯瞰すれば饅頭勇ましく宙を泳ぐ。吾妻の宿霧次第に消え山色群青。腰に露帯を纏ふ。自らの手もて櫛を洗濯し晒し乾しにすれば對屋の大原病院看護婦共二階より覗きて笑ふ。源氏の眞機め如く彌生の空に翻舞す。余の留置人たるの事實は脇に添ひし巡査あるにより彼女らの分別する處、余の粉裝たるや蓋頭襦衣八軒長屋の素浪人よりひとければ彼女等の噴飯を囁くも詮なし。彈から足袋のはてまで吾が手にて濡がねばならぬ非命を知らず呵々蔑笑するが如き女たちの冷淡さに酬めて更に掛け替へ三本を高くと濯ぎ晒す。余その下に悠揚位置を占め社甫の「登樓を高吟す。

花近高樓傷客心 万方多難此登臨

錦江春色來天地 玉壘浮雲變古今 ○錦江、は川の名、玉壘は山北極朝廷終不改 西山冠盜莫相侵 の名何れも成都に在る可憐後主還祠廟 日暮聊爲梁甫吟

花は高樓に近くして客心を傷ましむ 万方多難にして此に登臨す

錦江の春色天地より來り

玉壘の浮雲古今に變ず

北極の朝廷終不改

西山の冠盜終不改

日暮聊爲梁父吟

○古今に變ず、は段子璋、徐知

道等の如く古來蜀に據りて

變節常なき輩 ○北極、は

長安を云ふ ○朝廷、は唐の政

府 ○西山は吐蕃のこと ○後

主、は蜀の後主 ○梁父の吟、

は諸葛孔明の作といはれる。

朗詠の後ち看護婦共に背を向ければ白衣群れをなして窓に凭れ交々囁きて余を然視す、その眼に蔑笑の影を認めざりき。以つて余些さか満足す。

バルコニーより降りて先刻來のことを追憶す。即ち男が女の前に

御を晒すが如きは抑々可笑しくもあらん還た野暮とも評し得ん。

唐人は最大の無粋なるを「花下晒簪」と云ふ。咲く花のみが花に

は非ず、彼女達も亦た病室に咲ける花ならん。故に余の「花前」晒

簪」こと實にや無粋の極みなりけん。囁き出す方が當り前にて憤激

する方こそ非理なり。油然として苦笑相頷を歪ましむ。

三四日前に十五才の少年が連行されて來た。留置場の保護室に入

れられてゐるが警察署など屈とも思はぬ不敵振だ。係官もはじめ

は少年がひとりでおかれるのは淋しいだらうと思ひやり、余の監房

に入れさせやうとしたら余が怖い人だから嫌だといふので、加藤

木の箱に入れてやつた。處が少年は余の機代用にしてゐるトランク

に「樺太豊原東白館」といふ宿屋のレツテルを見つけてから急に余

に對する警戒を寛め今日から余と一緒に居りたいといふ轉心振りで

ある。

少年の生れは樺太の大泊で父は彼が二才の時に死別、家には母と

祖父、曾祖父が居つて母は野菜や魚の行商 祖母は手内職、祖父

曾祖父は鐵鎚を携へて北海の渚に鳥獸を逐ふ身であるが、一夜に四五匹の狐を獵獲してくる時もあつて生活は苦しくないといふ。

ところがこの少年の奴、留置場送りとなつた當座は從順しく見せかけてゐたが、連でも一筋縄で通る童んべどころではない。余は色々手と手を替へ策を構へて少年の身の上を誘導訊問してゐるが、この調子で成長したら將來相當の敵か者になることが想像される。

大泊の家族の許に在つた尋常三、四年から不良兒等とテントを山に張つて露營し、手あたり次第振つたつては煮炊きをしたりその金を以て欲しいものを貰ひ騙つてゐたさうだ。時には他家の鶏を魚針で釣つて來てテントの山で食つたこともあるといふし、時には街に密賣して小遣錢を拵えたといふ。これが尋常三、四年頃だといふから驚くの外はない。

彼は十三才尋常五年の春、大泊港から貨物船の船倉に潜り、まんと胸館に上陸、北海道一帯を荒し廻つてから今度は青森連絡船に便乗して青森に立ち廻り市内を面白く漂浪してゐる中に青森署に保護檢束されたさうだが、同署では家族に對して引取方を通譯しても驚かしめのために留置しておいて呉れといふのであつた。少年は同署に一年近く、半ば拘束された儼然仕の仕事を手傳つてゐたが、到底品行の納まる氣色がない處から某感化院に送つた。處が、少年はこゝもまんと脱走して再び單身樺太に戻り、自宅には行かずに界隈の山野に充宿してゐた。かくて再び家族の手に連れ戻されたが家族も警察署と相談の結果東京の積善寮に送り同寮から三宅島のる漁業家に雇はれる身となつた。然し性來の放浪癖に漬かりきつた彼は漁業家で奉公も合機出來なかつた。

本年四月初めの朝、主人から草刈を命ぜられた彼は、宵のうちに持ち出して隠しておいた自分の服や靴などを草籠に詰めて巧みに擬

装し、辨當を拂へて出發した。これより先、やはり不良兒でこの三宅島に來てゐる三名の者と脱走方針を協議してゐたのであるから彼等は、その日山に落ち合つた。彼は、定期遊覧船に便乗して大島まで來て電話で手配される處があるから貨物船密行を提唱したのであるが、他の三名はその意見に同意せず東京灣遊覧船便乗を主張したさうだ。そこで少年は單獨行動を採ることとして前記貨物船の下積み荷に於て遂に東京港人に成功したのであるが、他の異説組の三名は果せる哉逮捕されたいといふ。少年は泰公先を飛び出す時主人の金を三十円だけ盗取した。尤も彼に云はせれば「財布には百円余あつたが僕は三十円だけ貰つた。財布ぐるみ持つて來れば盗んこだとなるが、奉公した稼ぎを買つてゐなかつたから少し餘計買つて來たので盗んだのではない」といつてゐる。こんな云ひ分は確かに子供らしいと思つて可笑しくなる。

東京に現れた彼は傍帯の金を淺草邊で忽ちに費消して終つた。然し悪天才の資質に優れた少年は金が無くとも一向落着き拂つてゐたといふ。それといふのは、翌日から靖國神社の臨時大祭がある、この御賽銭を胡麻化することが出来るといふ自信をもつてゐたからださうだ。

靖國神社は参拜の人群が渦巻いてゐた。參詣が混み合ひ押し合つてゴツタ返してゐるから放り投げる賽銭もなか／＼賽銭箱にはまらない。少年はこの中を掻き潜つて社前の方にゐると五十錢、十錢の銀貨が雨と降るのだ。賽銭箱の脇には憲兵が箱淵の賽銭を盗み出されない爲に厳めしく監視してゐるさうだが、少年は監視の眼を巧みに避がれて落ち錢を四十円ほど拾ひ集めると再び淺草に戻つて映畫、食物、玩具などに浪費してゐたが、靖國神社は大例祭でなくとも日支團の出征遺家族が社前を埋めてゐるので、餘り高は通常の日

でも五、六円にはなるのださうだ。かくして半月ほど東京に惡の遊蕩を續け、再び放浪の旅を東北に辿り東北本線の急行列車に薩摩守をきめこんだ。列車が宮城縣の大河原に差しかゝつた頃、時局柄列車の移動警戒に當つてゐた福島署刑事に不審の眼を注がれ通行されるに至つたといふ。

これまで訊きたすには相當の骨が折れたが少年は刑事には全然泥を吐いて居らない。うまく追及すれば面白いネタがまだ／＼出てくるだらうが、頭の働く不良兒だけに上質黒サージ金銀の學生服を着たなか／＼の美少年だ。

五月二十三日

六時起床、稀らしく六時間半の睡眠をとり身心快調。昨夜來より讀み續けの「中公」二、二月號を拾ひ讀む、被檢事以來、時局の推移を把握するために必要なり。三土忠造の「帝人事件に就いて」の意見即ち司法機關の改革論策であるがすべて同意。

晝食後房內を堂々めぐりして倦意を忘れんとすれば壁の落書きが眼にとまる。曰く、大盜は天下を調歩し竊賊は死刑の宣告を受く。と。字拙きも云ひ得て妙なり。

本日新入りの朝鮮人六名あり、賭博犯の容疑なり、一團の中に二十才前後の壯者が下手な日本語を以て「丘を越えて」の流行歌を微吟し居れり。彼は日本の國情に疎く又かゝる場所にて放歌高吟の法度なるを知らざるならん。然れども年少の巡査これを引づり出して儉儉な暴行を加ふ。余これを目撃して公憤に堪えず巡査に忠告す。巡査却て余に挑む。平生この巡査の生意氣が甚だ氣に食はざれば左背負ひにてコンクリートの庭に叩きつけ大いに懲らす。四名ある巡査等この同僚を頃日來快しとせず、且つ又余の聲力を知るが故に徒らに拱手傍觀せり。

右朝鮮人の外に福島郵便局の書記が通行さる、三春町在で村一番の財産家なりと。然るに本日の大激震に彼は古本屋に於て、停電したので奇貨括くべしとて分厚い本數冊を窃盜しこれを他の古本屋に賣らんとせし折衝告され當局に檢査されたものなり。家に暴財あり身に教養ありて苟くも國家公務吏たり。輒近官公吏の綱紀弛緩を叫ぶや強し、況や官吏の窃盜をや、是に到りては全く同情の餘地なし。さるを朝鮮人には憚忍なる暴力を加へ、この窃盜官吏は市内ボスの買ひ下げ運動などありて柴田鶴作(署長)はその夜釋放せしめしなり。前項の如く本日午後四時、地大いに震ふ、上下動左右動共に激しく在場の輩いのちを惜みて叫喚す。余も亦大死を虞れ妙らず贈を冷やす。大正十二年の震災に次ぐ激震ならん。

五月二十四日

誤樂讀物、晝寝などして暮す。

株屋の荒井氏歸郷し、約東の山葵漬を土産に持參さる。單に房を購ひたるのみの顔見知りなりしが義理固き仁也。感謝。

××壽伯余の召に應ぜず岩水博士其他に余の藏幅額を處分し大部分使ひ込みたるらし。加藤木に小遣も與へられず氣腐る。

五月二十五日

午前中うたゝね、午後二時突然檢事局よりの召あり、昨年陸刑法の違反に問はれし折書かせられた日本無産黨に對する私見と題する手記は、過日、内務省に送られてあることを係檢事から聴いてゐたが、右の原本を内務省より取り寄せたる由、而してこれを余の聽書に添付し若干の補充質問に答へて午後四時歸署す。一茶ならずも『あなた許せ』の氣長さで決裁の日を待つより他なし。

賭博の嫌疑が晴れて鮮人の一味が全部釋放され、珍客共も殆ど押

送刑務所行された。ガランと空いた十室の留置場は孤城の廢墟に似て夜の底に沈んで行く。宵のうちは汗ばみを覚えるほど蒸しむしたが、十二時近くなれば換氣の小窓から陰濕の冷めたい風が流れ込んでき、眠いとも寝たいとも思はない晩である。時々犬の遠吠えが聞えるがそれがやむと蛙吹のにぎはしさで夜風に乘つてくる。何か事件の起きたかやうな妖氣が怪しく漂ふ夜である。壁には微燈に照らし出された妻の影が揺らめいて私自身を恨めしく見守るかやうでもある。そこでは私自身が主体として生きてゐるのか或ひは壁の影が現なき客体であるのかすら懷疑を有つ夜である。

この壁には何人かの血痕がベッタリと染つたかつてある、頭髮で擦りつけたやうな形跡の血痕である。晝はそれほど氣がいらでもないが、夜になるとそれがクッキリと目立つのは奇怪である。この血痕を凝つと視つてゐると何か体内に血潮が狂はしく嫌ぐのを覺えるこの血痕には夜な夜な凄惨な聯想が伴ふので何處も石鹼水雑巾でこすつてみたが混濁留の粒子の粗い中にしみ込んで全然とれない。

いつた何の爲の血か？幸ひ外勤課長の愛稱をもつ万年巡査の○が當番監視なので一服吸はせよと言つたらすぐ鍵を外してくれた。監視室にすぐ出て支那そばをおごりながら「血痕」が氣になることを話したら、詐欺の容疑者がこの部屋にゐて頭蓋をいきなり石壁に叩きつけた。頭をブチわつて自殺を計つたのである。物凄い出血で十針ほど縫つた。その男は間もなく首を絞つて死んだ。その男の「血痕」であるさうだ。彼は信じて切つてゐた妻に情夫のあつたことを知り爾來自暴自棄となり神經衰弱となり妻を怨んで死んだのだといふ。道理で幽怪な部屋だと思つた。明朝は留置人の立てこめうち四號室に移ることゝした。

五月二十六日

午前十時検事局より呼出あり、今度こそ調べも大團圓を結びたるならん。自分に有利なことあらばその意見を語れ、との事なり。二三の衷情を陳べれば伊東操事之を録す。想ふに余等の事件は係争の存在に於て素より決し得ず。きくなく、當局は余の左翼過去歴を重視し、或る意味では鈴茂、加藤勘十、黒田壽男等よりも比重のある見解に立てる由なり、その眞偽は知らざるも取調べの巨細を究め、特に認識一般を記録化せんとする當局の意圖には應にその事實あるが如し。仄聞するに新聞は「大井川の起訴確定加藤木は釋放の模様云々」とある由。勿論本日漸く取調べを了したるものなればこの記事は憶測に過ぎざるべし。加藤木は余のそば杖を食つたるのみにて確乎たる世界觀も知性もなし。一刻も早き釋放を念ずるのみなきに彼の神經衰弱は最近頗る抗じ些々たることにて余に敵意を示すが如く、又一方スベイに對しては從順辱辱の如し。スベイに阿附し余に抗せば早く釋放さるゝとの端見ならん。斯る檢察が全日本は無産階級と自由主義とに加へられたる彈壓とは解せずして余と接近したるが爲の災難と解するが如し。

五月二十七日

美之國、中央公論を讀む。
正午より一分間の黙禱を日露海戰の英靈に捧ぐ。
出獄後今や一ヶ月に垂んとするも刑務所とは違ひて光陰の早きことよ。

五月二十八日

土曜

陽

朝五時起床、例により冷水摩擦す。入場以來一日も缺かさず勵行してゐるが効ひありてか筋肉引き締る。在世時の体力には尚遠きものありと雖も下獄中に比すれば腕力などメキ／＼恢復す。これ偏へに冷水マッサージの賜ならん。體力自慢の査公等と腕押しするや翻を譲りたることなし。明治時代の社會主義者木下尚江は晩年専ら冷水摩擦を施せりと云ふ、而して余等の檢察前に於てもくわくしやくたりし所以のものは冷水法の功徳なるべし。余も亦生涯これを敢行し通さん。欲す。

正午迄中央公論を讀む。昨年十一月以降の内外情勢の推移を畧々會得す。畫に海老犬の差人あり。差人屋の圖書館食堂の妻君談にては水車型ダイヤの指環を拵めて女中と覺しき女を伴れたる二十七、八才の女性來り五十円を預けて行きしとぞ。大井川さんは食道樂だから毎食眼先を替へて差入れせよとの由なり。思ひ當らざるも他分は××伯爵の令嬢ならん。厄介なる人物現はれ出でたるものなり。二時より「故事成語蒐録」の續稿執筆す。

夕頃特高のN探房、妻よりの書翰を讀みす。文に曰く「出獄して面會するだけの費用を送金した方がよいと思ふからとて金券二十円に親子の寫眞近影を同封す但子もさぞ父に逢ひたかるべし、還た寫眞を見るに脛伸びて殊の外成育し容觀大人めきたり。

特高Nに本事件の消息を訊ねたが明確なることは判らない。鈴茂が起訴確定したさうだが其他は不明。地方關係で起訴されたものは目下のところ皆無。當局は五月一杯に日無、全評等第一次の檢察事件取調べを終了せしめる予定さうだ。これが事實とすれば余等の處分方針も内定されてゐるか、思はれるから來月中には起訴不起訴

が決定されるだらうとはN氏の談である。

余等被檢事者としても乃至は一般インテリとしても今回の檢察事件に對する關心の焦點は、事件が如何に裁れるかやといふところには注がれる筈だ。元來コミンテルンと日無とが連絡ある筈などとは見えて透いた内務省のデッチ上げではない。「吾黨は反ファッショ政治戰線統一の爲に闘ふ」といふ日無の第一綱領がコミンテルン第七回大會に於けるデミトロフ提唱の新方針を採用したものとすると當局の見解は、内務省自体が昨年四月合法政黨として認可した日無黨を中國侵襲の今次帝國主義戰爭遂行の爲め邪魔になるから解散せなければならぬとの見解に立ちこれを解散すると共にその幹部並に全國の進歩的自由主義的政治家及び學者までもも檢舉する口實に過ぎない。「ファッショイズム反對、帝國主義戰爭反對」が一様にコミンテルンの戰畧實行だと云ふなら尾崎博堂が第五十七回帝國議會に於ける「現役軍人の政治干與が憲法違反であり彼等のファッショイズムによつて吾が立憲議會政治を覆へされることを恐れ」て反ファッショの演説を三時間四十分に亘つてやつたこともコミンテルンの戰畧と云ふのか。

ファッショ反對は獨り日無のみの專賣特許ではない。唯吾黨が日本は無産階級に於て妥協性のない政黨であつたことは事實である。日支事變の擴大と長期化とが殊後國民の精神的支拂を必要とするから日無の如く靜觀主義を採られては困るゝといふために、反ファッショ斗争はコミンテルンの新方針たる人民戰線運動と同義語なりとして布いた今回の白色クーデターは安政の大獄と同じである。余等が如何に裁かれるか？の社會的關心の根本がこゝにある。若しも吾々の事件が既往の共產黨被告のそれに對する如く、治罪法に於ける國體變革や私有財産否認を目的とした結社罪として同法の第

一、第二、第三條を無暴に適用出来るかどうか。有識者の耳目、法曹界の談議はこゝに焦點を置いてゐると思ふ。

彼等「反動政府」の三段論法は
(A)共產主義は國體を變革し私有財産を否認する。コミンテルンはこれを世界的に實行するための國際組織である。
(B)コミンテルン當面の戰略方針は第二次世界大戰の危機を前にして發生しつゝあるファッショ反對の斗争に重点を置いてゐるが、フランス其他の國に於ける人民戰線運動は反ファッショ斗争である
(C)故に共產主義と云ひ反ファッショと云ふも同義語であつて治罪法違反が成立する。

といふのである。
この言ひがかり的強辯を以て治罪法違反が成立するとしたら方々にレンの文字通り「合法非合法は力の問題」である。
何れにしても、今日拘束されてゐる者がどの程度まで起訴されどの程度の判決が見られるかの見透しは極めて困難と言はねばならぬ。Nをして言はしめれば「大したことはあるまい」といふし他の特高に言はしめれば「飽くまで斷乎たる刑を科す」だらうといふ如く異論區々である。

出獄して知つた一つの問題は近衛が余の下獄中に辭職せんとしたことだ。いま下獄當時の時局の變遷を適及的に諸雜誌によつて調べてみると、彼の辭職せんとした動機は彼が日本に完全なファッショ政治を布かんと企圖したに拘らず閣内に反對異論があつて遂行し得なかつた。その結果は彼の辭職となり反ファッショ施政の意見を持つる廣田等の下野となつたやうだ。而して近衛の猛烈なファッショ強行の意欲は多少抑制されただであらうが、今回の閣内更迭といふ政變が吾々の事件の前途に好影響ありや或ひは暗影の度を濃くす

るものや判じ難い。けれども閣内更迭といふ表面の動きはその内面に觀察の眼を向けば、日本の現實の政治中樞が完全なる施政方針の一致をもつてゐないことは明白であらう。即ち、官僚と武断派とのプロック勢力が二派をなし、立憲政治を逸脱せしめまいとする自軍派も亦た最近國民の期待と多くの共鳴者とを味方としてゐる。即ち、政治イデオロギー的には二派をなし、近衛等が前者に、廣田等が後者に屬すると見ることは大過あるまい。この内的對立が近衛を悩まして病氣にさせ辭意を漏らさしめたものであらうし、且つは廣田等の辭職となつたとすれば、今回の内閣改組はデキケートである會で陸軍部があれほど嫌つた宇垣を外務に据えた裏面には對外政策は勿論、對内的政策に於ても從來固持し來つたものを或程度まで變更されるといふ萌しが含まれてゐる。

北、中支には日本の頭目ブルジョアには投資させまいとしたのが日本のファシストの叫びであつたが、我を擡げてその投資を積極的にさせるといふ方針に變更した結果は、金融ブルジョアの代表たる池田成彬をして大藏大臣の椅子に著かせるに至つた。荒木貞夫がいくら道學的な男だからといつても文部大臣となつたことは亦た大いに人の意外とする点である。一眺め見渡せばこの内閣更迭は猪突主義を改めてファシズムの惡氣流への國政の舵を自重して行かしたまふといふ意味がないとは云へまい。然し、角度を別に考へればこれとは全く反對の、つまり現状よりも強力政治に行くではなからうかとも危懼されるのである併し宇垣は年輩思想ともに閣僚中一頭地を抜いてゐる男だから軌道に外れる無茶は自戒するだらうし、荒木とて學問識見の備つた傑物だけに物の辨へをもたぬファシズム達とは少からぬ徳庭があり、君子の一面もあり、恐らくは猪突組に乗ぜられるが如きことはあるまい。けれどもこの更迭によつて特に期待

するところはあり得ない。謂はば雁首のヌゲ替へによつて僅しい非常時を國民の腦裡に強く印象させることはあり得てもそれ以上の安定感を國民に齎らすことは期待出来ぬ。

そこで吾々の事件はこれ等の内閣編成替へがどんな影響を持つだらうか、抑々これを望むことに於て無理だが、N氏等の話によればファシズム化への偏向を指し止しめやうとする若干の力が認められることであり、特高事務なども今後はファシズムの取締りを強化するやうにとの違ひを受けるさうだ。

漏れるものは薬をも絶つ、助からうとする意欲が余の情勢分析を誤らしめてゐるかも知れない。

日本の現實は總ゆるものが混沌の狀態にある。好戦金融資本に翻らされた軍部が官僚と結んで政治を支配し政黨はメメ出しを食つてゐる。それまでされても敢然としてこの反動勢力に戦ひを宣する政黨政治家が日本に一人も居らぬとは全く不甲斐なき限りだ。社大黨は逸早く軍部の鼻息を窺ひ戦争協力を公然と聲明するに至つた。藤生、河上(丈)、三輪、河野、西尾、松駒、淺沼は労働組合を戦争協力團體にしやうとさへしてゐる。彼等はやがて日本の労働運動史上に一大汚点を残すや必せりである。

帝國主義戦争絶對反對！を續けて來た余等は今更戦争協力する等意志は毛頭ない。第一知性ある人間が社大黨幹部のやうに先日まで戦争反對を自黨の政策に掲げながら舌の乾かぬうちに豹變出來るものでない。彼等には近代自我も又た、確立した世界觀もなく、あるのは勞農大衆を踏み台にした賣名と時局便乗による體官慾のみである。斯る醜態が「政黨」なる徒黨を構成し大衆の指導者を自稱して國家と國民をやがて不幸に陥らせることを考へる時、余は重刑に處せられ獄死するとも正しく生きること誇りを持ち性格の曖昧な現代日本人にも我れあることを示したいと思ふ。

土屋ノート

俳號に就いての憎まれ口

安達 正博

明治の文豪と云へば、露伴、鳴外、漱石と著名な人から、地方の文士に至る迄殆んど雅號をもつてゐたし、大正に至つても半減したとは云へ雅號の文士は澤山ゐた。けれども今日はどうだらう。最早、雅號など用ひてゐる人は全く見當らぬ。本名が若しくは全然匿名である「ラオコーン群像」の作者は匿名どころか不明でさえある。名を明かさず傑作を后世に残すことに、昔の藝術家は秘かな悦びを感じてゐたらしい。志賀直哉が賞讃して止まなかつた夢殿觀音亦然り。昔の藝術家は名前に依つて作品をみてもらうのでなく、作品そのものの價值を重視したのであらうか。

私は之を大變興味しく思ふ。悪口云うだけの匿名批評などと異り、一生を一作に打込み綿密な検討を経て、之を全く無署名で發表するとは美しいではないか！ もつとも昔の人の

は大抵發表の意志がなくて、死後永い間を経るまで發見され、誰の作か分らなかつたなどということが多いが、今日のやうに發表機關その他思ふに任せなかつたとはいへ、やはり作者の心情は興味しい。しかし明治の文士の雅號は、決してこの興味しい匿名精神から由來したものではなかつた。彼等の文學への情熱はひたむきで立派ではあつたけれども、そのセンスの頭なであつたことも全時に云へなくはないのだ。その証據に現代文士は氣恥しく、雅號などとても使へぬという人が多い。大抵本名であり、又は全然別個の名前で書いてゐる。たとへば中村光夫は本名木庭一郎。筆名が本名のごとく、さりげなく平凡。そこ

が、アンリ・ベルがスタンダールと筆名したのは匿名精神。まるで異名、姿をみせぬ。現代のセンスに生きる文士が、今時雅號で小説など書く氣持になれないのは、よく分る氣がする。白鳥の秋聲だのと殊更つけて名が正宗であり、徳田であれば、決して匿名とは云へない。單なる流行の裝飾に過ぎぬ俳號亦然。昭和も半ばを過ぎて尙俳人たるものは一時代前を低徊してゐるとしたら困つた

實朝忌

浦山舞心

冬三日月都心にかゝる低ク空あり
一茶忌また結婚記念日朝焼けたり
寒曉の夢妻立てどこち向かず
學舎の灯冬垣隔てわが學古る
腦院の棘の鐵線無言の雪
神の要素しりぞけ寒し誕生日
實朝忌松葉がはじく薄日千々
炬燵の子ら集つばめ父を迎ふこと
新婚の友に

うらゝなる第二樂章疑はず
智の芽あたゝか子の言ふ何故のきりなく

餅の微

石崎流波

冷たきドア排し手鏡向けられぬ
病枕に寄りて栗食む妻らしく
待ち倦みし患者の一人火鉢去る
しぐれつゝ露店の淡き裸灯かな
日めくりを厚く剝して年惜しむ
流感のせいにし母の忌を忘れ
妻留守の厨に馴れず餅の微

瓢客

弘中雄天

日向ぼつこ猫へ憎しみなげつける

春泥や瓢客露路を狭く入る
電熱器の殘像北斗一ぱいに
草萌えて網膜はふくるゝごとし

飛岡老紅女

餅の感觸

三日月の雪嶺に果てし束の間や
遠き秘め事炉邊に默せば昨日かと
搗くごとに餅となりゆく手の感觸
粧ははぬ二月農婦は肌目細き
鵲の聲思念を割きて纏まらず

初夢

小野曲水

蘭玉の小判くるめくしづこゝろ
風呂敷を繕けば林檎の山なだれ
焚火の輪土工作業にかゝるまで
風と子と遠くつなげる糸見えす
初夢も見ずに眠り足りし目覺め
煙草の火貫うて混じる焚火の輪
聖樹の前彼と彼女のごと撮らる

ふところ手

松本松甫

冬の蠅病臥の吾に親しむかに
ふところ手財布のぬくみ握りゆく
白陶の冷たき朝の卵の黄
琴に觸れて一絃の牙え娘が君
女正月妻らも俳句文學す

鳶の輪

岩倉秋湖

大吹雪止みバラ色に明けし山
納屋に農具整然として冬に入る
雪を來て灯の美しき街に入る
雪嶺のかゞやく玻璃戸子が開く
鳶の輪に雪霽れの街うつしく

吹雪の街

安達道人

雪を踏む靴の軋みに心たらふ
無帽かなし猛る吹雪にさからわす
背を向けて吹雪の街を後去りす
陽は薄く見えぬて吹雪猛る街
吹雪かれつ盲目の吾子の杖となる

月赤む

田村秋陽子

貧に耐ふ忿怒を雪に埋もらせず
風のあらぶる野にて抒情なし
冬崩るゝ憶ひを遠く月赤む
北風は玻璃にいよゝ強し語らねば
冬雲のちぎれかなしき風の聲

雪嶺

栗野松雲

オリオンの原やシグナル寒き青
カーブす鐵路オリオンやに傾ぐかに
背に巻さむくオリオン仰ぎけり
オリオンのまばたきしきり戀得しや
オリオンへ下駄ひびかせて坂下る
雪嶺や古都の街央ビル競ふ

枯野の中

野口青愁

炬火かつと炎ゆれど懷疑解けぬ夜ぞ
枯野中眞青なる夢ただに欲る
寒星に照られて夢の壁青し
夢の隣ちらゝ炎ゆる枯野星
冬の灯に懷疑とけぬ瞳ちらゝす
星びと顔えるのみの寒夜なる
對ひ居て寒夜かなしきまでの默

冬の波

茅根糸遊

落葉ぬくゝ土に坐りし子にふるゝ
もてあそぶ美しきものの鳥爪
冬の日の温き石塊撰つてゐる
袖を食ふともしび冷えて指冷えて
冬の波石ひきもどす力失せ
冬波やセバート驅ける砂傾き

基地

門岡敏朗

起重機の影響ち基地の水凍る
夜の冬田照され衛兵後ろ向き
兵等驅け飛機寒雲より降下
信號燈凍雲曝し移りけり
母待てる家路寒林星が降る
洩るゝ陽の寒氣に觸るる扉を開けぬ

安達正博

神の寵いつまで雪のしづかな日
火事はげし悪しき記憶につながりぬ
降る雪やわが家をめぐるとこも貧

長く病床にあるU氏へ

なほ残る夢をあたゝめ冬を病む
偽われ尙愛しゐて蜜柑吸ふ
遮斷機は凍てゝ嘲ける聲耳朶に

阿邊光惠子

冬帽の型崩れるて髪汚るゝ
立春の窓々開けて鎖含帯
冬帽の目深に見それ悔を生む
風花の奥の日輪黄にまろし
冬芽尖り向天何を欲る心
紫陽花の冬芽は確と天を指す
風邪癒えてうからつゞ外に出づる

永山香雪

陳情の起案に雪の夜は更けぬ
陳情書ふところに雪の村を發つ
陳情の旅事々として雪降り
荒れ狂ふ吹雪に鬨志燃ゆるかな
寒からじ心に燃ゆる火のありて
雪の日や上書の成否天にあり
陳情の赤心燃ゆる雪の中
氷雪の爲めに陳情はなまれじ
陳情の吾れを拒むか大吹雪
雪を蹴て大玄關に跳り込む
暫し待てと小さき火鉢を與へられ
いらくときを過して炭火消ゆ
ストーブに倚る高官を睨み詰め
郷民の暮の疾苦を縷々と述ぶ
陳情に必死の汗をたぎらせて

久保龍膽子

鴈のあと何故か心の急がるゝ
傷心の癒す術べなし草矢打つ
落葉幾き月下の墓を埋づめ居り
鳥雲に入り娼婦にもある感傷
銀河澄む過去を船路にすてるべく
捲上げ櫓あらはれ濃霧陽にはぐる
霧の中雪崩れの如く放馬過ぐ
春星がまた来る明日の幸約す

齋
藤
砂
丘

虹うする天の明るさ吸ひながら
洗ひ髪片膝立てゝ梳る
ひそやかに鎌磨く刈るべき草に隠れ
鳴く蟬の翅搏き強くとび移る
緑蔭の地に描き幼き汽罐車よ
ガラス良く磨かれ蠅の生れけり
波荒るゝ海堡ひるがは咲けり照る
喪服冷やか香水匂ふ透明に

俳壇の公器
不偏不黨
純正俳句の
普及と新人
活躍の舞台

特に句作講座に無料
添削指導の設けあり

俳句研究社

東京都中央区呉服橋2～3

(石川桂郎編集)

▽現代俳句用語辭典△

俳句研究社編集部發行
ボケツト型二九〇頁 價二五〇円

在來の季寄せ類題句集とはその内容を異にし、俳句の用語を懇切に解明、用語別に近代作家の例句を挿入、新人の作句指針としては最も至便で責任を以て推奨するに足る良書である。購入希望者は本局代理部に申込あれば取次ぎします。

(土星編集事務局)



土星復刊記念俳句大會記

汀湫生

二月十日（舊正月初二日）午後一時より平公民館に開く。主宰白先生、知友飯塚深次氏から贈られた大花輪一對を正面の支欄に飾り準備完了のうちにから熱心なる同席諸氏がつめかけ、主宰者としての白らしい悲鳴の連続裡に前日送の出句分のプリントを配り、當日出席者持参の出句を清記して壁間に貼り、互選に依る。ホト、ギス系あり、春燈あり、若葉、馬酔木、筍、濱、かびれ、麥等々あり、全く結社を超越しての多數の會合は珍らしいものであつた。

東京から來れる筈であつた秋元氏は病氣のため、石塚氏は御子息の病氣でも合はれる筈で、俳研編集長石川桂郎氏（石の御來平を主宰から開會の挨拶でもお託し、桂郎氏は委しくその事情をお話して諒解を得、五百五十余句のうちから各人八句を選出、高萩篠生君を煩はして披露進行中、突然寫眞屋さんの焚いたマグネシウムの爆音で汀浜が代り、終りを主宰思白先生の披露で終了する頃、今年二度目の雪が玻璃窓を透して白一色に降り積み、遠路参會された方々は雪におどろいて歸りを急ぎ探聴の結果を見ないで歸られたのは残念であつた。

桂郎氏は選句に對して約三十分ばかり懇切な講評をされ深い感銘を與へ、降りしきる雪に急かれつゝ午後六時散會した。

尚、高點者及高點句、其他の句は左の通り。二五點後藤翠洋子、二

一點鵝湖步、一點鴈高木可水、一七點椎名岩木、內桶東聲、一五點綿引欣吾、一四點久保龍膽子、三點猪狩銀飛岡老紅女、一點高杉籬生、西山春潮、栗崎曉山、一七點山縣八千代、猪狩與四男、一〇點大平千枝子、九點齋齋砂丘、高萩正子、金丸鐵齋、姪田也、田村秋陽子、以下略、選者筆短冊は出席入賞者のみに贈呈)

寒燈下子と寝るのみの幸で足る
9 寒灯下足物ばかりと切りたる
8 炭吹くや首根にまでも父の鍬
8 嫁く身の幸疑はず夢を踏む
8 母と子と夜更の林檎音しと嘯む
8 ふるゝものみな春と思ふ石蔵りぬ
7 寫眞師が寒き遺族を覗くなり
7 雪雲に惹かれ少年期を脱す
7 風花やいくさのごとく葬旅立つ
6 霜の道どこまでも母の足跡なり
5 病堪ふる冬病窓重き鉛空
5 地のぬくみ微かに燒野夜に入る
5 鐵打つ音雪空崩れおちわばよし
5 坑夫死にベクトルの芥に雪降れり
5 蒼光り山河の枯を天に曳く、

久保龍膽子
後藤望洋子
久保龍膽子
菊地秋歩
高山霞櫓
伊藤照子
高木可水
猪狩銀龍
椎名岩木
海野紅露
伊藤南石
西山春潮
西村秋陽
菊地秋陽
齊藤砂丘

5 本借り貸す少年花の襟巻す
5 汽罐の煙巨きく夕野の陽を奪ふ
5 寒紅や瘦せしと思ふ癒え近く
5 死の眼もて嬌婦己が野を慕ふ
5 父母の膝下より住む地なし煙間風
5 鵜交り羽うてば大きき冬日たり
5 枯野のみ來し佗しに手を抱く
4 枯野犬速くを驅けてとゞまらず
4 春立つや漁港のバスの魚臭濃く
4 猫柳水面にふれしところより
4 麥の芽の伸びつゝ海が荒ぶなり
4 川底の星影くたさ着洗ふ
4 嫁がせて母は寒夜に茶をすゝる
4 人も街も寒夕焼を識らずゐる
4 寒噤や秒針げられし過去をもち
4 咳に耐ゆ針掛けの暗うごく
4 多空へ病院白き鋭角もつ
4 家鴨つぎゝ流れに入るや梅まふし
4 しはぶきに觸るるを見えし猫柳
4 トロ黠し硬山鋭角のまゝ凍てる
4 僧庵の明け暮れひそと冬椿

其の他

夜吹く風冬の北斗は地に觸るゝ
平春のひかりの鼓動感じゐる
流星のしきりなる空仰ぎけり
冬の蠅日向へ己が影を匿す
岸壁に凭れて釣るや日永人
菜の花の温床咲きを活けにけり
空風にゆすぶり揺られ梅咲けり
荒れつゞきたる早春の海眞蒼
臘を焼く煙の臭き餘寒空

猪猡 伏見 後藤 猪丸 金崎 佐々木 山平 大岡 飛田 佐藤 高村 中根 相原 栗崎 井澤 高山 山口 野口 川口 永島 鈴木 福貞 三浦 磐城

猪猡 十郎 奥四男 葉子 望洋子 哲郎 鐵洋子 茂炎 一空 一枝子 美津江 老紅女 江村 正士 達男 斗美代 曉生 箕生 八千代

蕉洞子 青愁 千浦 香雪 たかし 好ん 静波 平

枯菊を刈り小ざきけれど庭整ふ
喜びを聖樹に飾り思ふ者どち
バラツクに影もなくして雪景色
尉ごと乏しきまゝの年暮るゝ
聖樹の前彼と彼女のごと撮らる
光れるは陳る湖面か伐木音
海水の墓多瀟々と寄するのみ
獄門は凍てあり滌り戸を開く
家鴨よく雪解の川登りけり
玻璃に射す早春の日箭肺に込む
迎春の夢追て笑む少女の瞳
子の咳に曇る氣配や二月の灯
とりあえず山に吟行多ぬくし
霜冷ゆる屍室は蔽ふ帷なし
待みるものなし冬木そゝり立つ
多の雨一日終えたる風呂愉し
追羽子の少女寂寥の瞳をもてる
風邪に咳く社宅崎は壁一重
雪空に吐くやぐくし地つき唄
笛鳴を障子の外に風邪籠り
ダムの水凍てつくされて月に浮く
病む妻の見たる雪を掻きにけり
春柱の他は冬田に立つものなし
追儊豆數へ四十路に近づけり
うらゝかに髪とく乙女の指細し
厨邊に日射して來たり十三才
バス消え去るいひつめたき地の果に
秒ささむ枕時計も凍てるかに
湯のたざる音の靜かに春立てり
猫柳葉にかざりぬたわむれに

中 山 郷 成
澤 海 掌 ばまほ
中 野 村 曲 水
小 松 野 雨 竹
小 訪 林 無 骨
小 訪 林 無 骨
三 好 間 帆 帆
曳 森 八 香
鈴 山 木 八 香
佐 邊 抱 郎
佐 邊 關 湖
土 田 華 岳
松 井 潤 治
松 井 潤 治
増 井 潤 治
菊 地 眞 知子
清 城 静 水
高 藤 春 水
伊 藤 照 水
姪 田 ち かし
織 田 落 美
鈴 木 蕉 風
中 根 昔 人
安 達 道 人
高 城 圭 兒

— 40 —

阿山小杉御飯伊坂井松佐大猪小名猪界猪横浦高瀬田渡宮和山吉安井
邊下高木代田藤部本澤木友好和三和井
光率舒郁子俊雪海義久麓岳好和三
惠賓明子子輔行風公三村泉人幹竹
子賓明子子輔行風公三村泉人幹竹

思白先生選

峰松安泉
弘中雄天
豐田君仙
安島汀渚

山下率實子
高木可水
西山春潮
菊山秋步
齋藤與四男
久保龍躰
菊地秋歩
高木たすく
金丸鐵蕉
猪狩銀龍
浦山舞心
高萩篠生
内桶東聲
椎名岩木
横田即寸
高萩正子

桂郎先生選

川島たかし
高木可水
野崎茂炎

以	山縣	御代	內桶	海藤	伊藤	大井川	猪狩	豊田	伏見	栗崎	久保	伊藤	清水	佐藤	高萩	猪狩	齋藤	大山	菊地	飛騨	西園	高木	
上	八千代	茂子	東露	雪行子	美智子	銀龍	君仙子	眞	葉山	曉山	龍壽子	ちかし	照子	春水	關湖	正四郎	砂丘	千枝子	美津男	老少女	はまほ	秋歩	春潮

安島 汀湫

雪の二本松

伏見葉子さんに



土星集

思白
汀湫 共選

仙台 石崎 流波

同 横田 艸人

二本松 安達 正博

茨城 野口 青愁

福島 高荻 篠生

仙台 加藤 三峰

寒曉や藥瓶の目盛り掌に固し
寝入る灯を消す刻秒針寒夜を透く
夜業の灯母なれば子の尿意らす
躊躇はぬ聲となり四十の豆を撒く
春立ちぬ逆光雪にまばゆくも
寒雀や今日も来らず日々を病む
焚火する呵々大笑の煙濃く
常に聞く瀬音の今朝は沓え返る
雪沓の重きが衰し遠き道
無爲の日々冬バラ炎ゆることもなし
葛枯るゝそこより家の崩れそむ
枯蔓に這はれ崩れてしまひし家
枯木折る人が枯木にまぎれる
野の霜を踏むやばりく裂けゆく思惟
冬の霧自聖のビルをひたつゝむ
鐵骨を冬空に打ち建てすゝむ

診察終ふ雪解半のいつか止み
手袋脱ぎ更にかくしを檢めぬ
赤彦を想ひ寒鰯を焼きつゝ食ふ
門灯に雪すかし見つ戸締りす
残雪に蜜柑の皮のしるき露路
聖夜その假面が笑ひかける妻
ガード下佇つ冬帽の何を思ふ
昇降機ひらくスケート手に少女
渡舟待ちつ餅の掌くらべる農婦
遮斷機の上り一朵の凍てし雲
寒曉を生きたる唄漁船が錨揚ぐ

岐阜 只野 曠兒

福島 飛岡 老紅女

中島 山嵐

岐阜 梅村 理恵

福島 横田 即寸

宮城 岩倉 秋潮

岐阜 武藤 ひで女

岐阜 宮下 六羽

新患の言葉訛りや火鉢の話
陽を吸うて綴ち糸くばむ蒲團かな
冬樹地にまだらの影を躍らしむ
片頬に異性の息吹き春のバス
わだかまり和せず二月の月缺ける
埋火や戀覺めて猫うすくまる
病み居ればせめて紅引き寝積まで
金星の牙えを狂はしきまで戀へる
鹽鮭に久しき食の増す朝け
醫務室の寒燈にかゞむ影浮ぶ
底冷の病廊靴音固く去る
炭焼の生活を秘めて山眠る
オルガンの冷たき蓋を押し上ぐる
長堤ボブは冬の天を刺す
粉雪のしげし富直日誌書く
瀬を過ぎてよりの流水ゆるやかに
雪厚し朝焼雲が動き出す
たどたどし仰臥の箸の雑煮餅
極限のベットに生きて四年の春
略 血
血の匂ひ足の冷たき意識の中
渦なして雪片仰臥の臍を襲ふ

鍋焼を食つて退院祝ひけり
夜半の冬酔ひし米兵唄ひ過ぐ
金星の輝き見えて昏れ迅き
並べ焼餅それ／＼の印しあり
愚夫として妻の歸りを炉火守る
湯のたぎつ音たえ雪の庵辭す
春近し療養二年手衛決意
愛激し雪握りしめ握りしめ
大火鉢ひとりて圍むとき旅愁
冬日和けふあり過去を忘れある
病院の固き雑煮をひとり食む
羽根の音病床の娘の耳朶を打つ
戸主としてベン細やかに初日記
亂雲のたつや陽の目に雪の色
陰垂の人遇はすして冬酣くる
南天に乾反葉見えて冬暮るゝ
野分すと目醒むるばかり虹立ちぬ
生れたりしひそけく完き孤にありて
寒月光梢の影の地に吸はる
雪霽れて枯枝天に擴これり
開放の病室寒風に煩切らる
いつまでも乙女で居たし牡丹雪

白き息濃し此の年も生き得んや
癒えたしや身の凍るまで夫送る
肩廣き夫に抱かれ北風和らぐ
雪しきり人戀ふ息のつまりきし
夕日いま雪野は翳の極まれり
尾行られるごとく落葉の夜を急ぐ
神前の落葉は黄なり銀杏なり
日短く朝を灯して厨妻
厄日今日事なく案山子長閑なり
開墾の豊かな稔り守る案山子
わが乗りし汽車の白煙氷田に見る
席譲るゆづらるゝ人も風邪マスク
抜け出でて汽車は雪山ふりむかず
炬火燃えて笑ひの裡に成りし縁談
的外れて雪に喰ひ入る雪礫
たくましき冬木の丘や古墓一つ
風花や舞ひて吹き寄る病窓の花圃
雪原の晴れを列車の勇み來る
凍雲の明けを踏み急ぐ新聞子
ほか／＼と雪の軒端や里の晴
湯婆や病むわびしさの足そろえ
しづかなる力や冬芽角くみし
雪しゝま看護婦黙だし採血す

同 森田紀よ女

二本松 鈴木 一步

石巻 小野 曲水

岐阜 伊藤 南石

仙台 鷹村 光始

見舞給ふ師はおもむろに手套ぬぐ
雪の夜やコゴアをすくふ銀の匙
小寒やわが脛瘦せてひと握り
新雪をうつし電球の中しづか
冬の海孤愁に耐えず歩を返す
寒天へ萬物ひかり持ちて硬し
冬野分しばしは父の聲となる
つのる北風月にアイヌの叫ぶ歌
北風は月にアイヌの歌は地に
雪原の涯にアイヌのボロ見ゆる
ボロからボロへ馬橋の鈴の音透る
雪降つて降つてその日に妻となる
ふるゝものみな春と思ふ石蹴りぬ
驛の梅煤けてゐるが陽をあつめ
砂掘りつ埋めつ一人ツ子の春や
春寒き夕べサイレンのたうつ如
寒鴉じつと見てゐる茶を摘めり
足装はくや一夜の別れ惜しみつゝ
パス降りて月の雪嶺をびえ見ゆ
寒の星頭上に一人のみの旅
戦のその手農婦の手鼻かむ
野火還く昏れゆく中に人を戀ふ
赤い手袋そしてあやされている幼児

茨城 高松 蕉洞子

二本松 諏訪 無骨

平 内桶 東聲

福島 生田 目源雪

茨城 茅根 糸遊

さん／＼たる冬日健康のうれしけれ
冬雲をあくがれ歩き鳩の聲
鳩鳴くや冬日はろ／＼と杉の道
亞雀氏の新樂を祝ふ一句
館成りて万劫の幸祝う春
炭おこる間を虚ろなり我の影
舟腐ち沈みて芦間冬ざるゝ
冬の蠅病臥のわれの手に生くか
竹の雪撥ねてしづるゝ陽の粉かな
妻の手の餅いたはしき日々の水仕
ねんねこに追憶限りなき今宵
水仙花活けし心を匂はせし
風邪十日癒えず指輪のぬけやすく
行きすりに香水散らし冬の女
思ふこと云ひそびれるて寒牙ゆる
諭されて黄菊に甘く泣き濡れし
人混みの中のマスクは異國人
灯を消せば雪積もる音聞ゆかに
除雪夫に聲をかけつゝ汽車徐行
息白く受話器を包み應え待つ
雪嶺へ町行く僧の古衣
陸岸の青き香りの雑煮かな
書初に紙三尺の白を置く

福島 松本 松甫

二本松 安達 道人

伏見 葉子

秋田 中野 好文

二本松 織田 猿太郎

風花や店さびれたる 鬼瓦
焚火小さくなりて雪空すりさがる
時雨來とどつと焚きたる炬火明り
シゲナルの青しん／＼と枯木染む
枯山のかぐろき焚火跡なつかし
初鴉曉の空氣に量感あり
風うなり風は足元より吹けり
フリージャの楚々と咲き出て小さき陶
妻もやゝ老ひぬ手毬をつく唄も
寒の水流れ砂の黄まざれざる
陽に對ふ苔の青さよ寒の水
寒の水今日を生くべき力持ち
子猫の舌貧しき指にザラザラす
研燃ゆる煙研道ふ空ッ風
白足袋の蹴る裾裏は火の色に
寒の月頭上にベタル踏む義足
初髪は髪と知らで妬心わく
炉を囲み雪崩の惨を語り更く
雪崩來る予感覺ゆる夜でありし
葉牡丹の飽いたるまゝに幾日敷
葉牡丹のほこり拂うて更に活く
うつろの瞳に青蛾は壁にたじろかず

福島 田村 秋陽子

茨城 緑川 藻生

皆川 玉蜻

勿來 佐々木 一空

二本松 柏谷 魁星

石巻 大石 不來方

運速なく片々の雲月をよぎる
盆火さかる遣兒空襲の夜を語る
哭き哭けど善意捨ててよ秋の風
市營住宅隙間風とは言ひ難し
書を伏せて下駄つゝかけて夜警かな
吾は書を妻は内職の毛糸編む
寒の夜の廳舎寝たり鼠と吾
寒念佛辻で亂れてとゝのひぬ
書見器の桿眞一文子冬の雲
藥香に隣人逝きて廊寒し
逝きし人のマツトの汚点に冬日影
殘菊の枯れて悔ゆこと多き日々
病む窓邊壺菊凍てしまゝ挿され
雪解水陽の沈むまで樋傳ふ
烟の菜も吾の行く手も凍厳し
くつきりと雪の伊吹見え妻濯ぐ
憎しみを身ぬちに燃やし炉火を掻く
車窓拭けば雪嶺眞向に迫り来る
霜の朝水藥一氣に飲み下す
雪深し漏灯を人のよきり来る
風花や尾根光らせて雲飛べり
陽傾き雪野は青きかげりもつ

平 福貞たもん

仙台 中村波以洗

岐阜 小倉 三可

成野 逸歩

松久えい子

凍星が搔きこぼるゝかに流れ
守銭奴を嘲りひとり鯛食ふ
病舎の壁に秋日ゆれる愁ひの曲
枯木打ち顫ひ友情裂くごとし
友に盗汗拭かれるて枯木が見えず
風花の池面に消えてゆくはかなし
病者かなし寒夕焼にまみれ歩す
雪原に月出づるあをき夜を寝ねむ
肋なき背に尖りて寒の鵲
燃えあがる焚火の上の冬星座
雪積りゆく水仙の薔めけり
略 血 後
吾いのちあり新雪に指ふれて
いさかひを纏むすべなく年果つる
春立つや櫻櫻替ふ兒の天を蹴る
水涕をすゝり白壁動かざる
吹雪けるやブルスとる婦の胸隆く
見舞妻手の小さゝとその胼と
闘病の見あきし庭も冬に入る
トラツクの物積む音も師走なる
窓に見る雪童心の日を憶ふ
病人に早や夜が来て日の短か

千葉 渡貫ひろし

岐阜 加藤 淳

種田 昌子

宮城 安田 恒人

仙台 山谷 唯次

牡丹雪しばらく美しく街灯下
雪雲の盡きたるところ陽の落ちぬ
冬の闇下駄音寒く吸はれけり
日の照りて屋根ざわがしく雪消ゆる
鐘數えつゝ除夜の火をひとり守る
磯波に初日欠けつゝ揺らぎつゝ
美しき銀杏落葉にしぐれ来し
初日影大樹亭々として並び
湯の町や袖觸れ合うも懷手
孕み犬眼を細めつゝ春の縁
折紙に興じて日射し春隣
雪の夜やこけしの子守影まろく
打つ釘の外れて指打つ寒きびし
冬日背に尻おくるは皆病者
落葉焚く煙地を這ひ幹にからみ
武蔵野の落葉とあそび捨て仔猫
武蔵野の冬枯獨歩の詩を想ふ
歸路阻む遮斷機おりて氷雨空
連結夫寒風截つて貨車寸斷す
雪霽れし驛構内に月を見る
風花や注射さくる手こきざみに
笹の氷柱岩を噛みある峽の路

石巻 秋葉多賀志

逗子 佐々木 迫川

福島 坂本 久三

仙台 後藤 春石

東京 坂ノ下はじめ

平 高瀬 晶魚子

仙台 中山 郷成

玻璃凍てゝ白衣まばゆき朝日かな
銃聲も木魂も吸うて冬木澄む
冬蠅に目覺めもの憂き病ひかな
木枯を背らに肩の尖りかな
残されし柿の實一つ同じ道
薄氷割れよくとはる聲石割女
凍月を背より浴びて影急ぐ
寒卵一つをのせて粥の膳
汐鳴りのまたもどり来る初日かな
初仕事歳月古りし道具箱
靜かなる興奮に満ちスケート場
スケートの神技ライトは集中す
スケートの亂舞となりて昂ぶる樂
凍土掘る響工夫の脳天に
フールド冠をんなはきんものを云ふ
母子ホーム横目に娼婦雪を往く
晝まどか雪の雫が生む水輪
凍てきびし眞夜の蛇口をゆるめけり
落日を背にスキーヤー群下る
冬療に病む兒手鏡照しるて
母遠し冬病窓を詫びカーネーション

松村 瀧山 喬

宮城 及川 良枝

二本松 安齋斗良二

菊地 圭兒

福島 菰田 康彦

岐阜 國部 菊代

大倉 みず代

寒菊の拾つるに惜しき白きあり
紅梅に潮満ち／＼て岩をかむ
凍てつきし月に葉一つ散りける
寒行の尼僧の足袋に夕みぞれ
春立つや機織る音の軽やかに
村の家の雪に埋れて夜の明くる
年の瀬を身近かに夜の驛に付つ
オーバーを着しまゝ會釋吾子二人
オーバーをとれば顯はに吾子の腕
病む吾に寒鯉提げて妻ひさに
破れ庇ゆがむ氷柱を支えをり
深々と花びら重ね冬薔薇
佗助に日數かぞへて便り待つ
石つて子と投げ合うて冬の海
尾根遠くシユブルのあり冬の山
海鳴りも酒も冷たしみちのくは
初霜と聞き更に斷ち難き床
陽だまりを追うてまゝと納屋を背に
木犀の香に目覺むれば妻の見舞
遠吠や天狼の牙え人を射る
ブレーキの軋み甲高く寒しまる
沖天に三日月凍てし寒の宵

横濱 菊地 昭二

山形 布施 正俊

仙台 澤 掌之

遠藤 愛子

水島 碧

富塚 松聲

早坂 寛

冬ざれや湖渡る雲の果て燃えて
水潤る湖のおもてを雁渡る
遠く來し紅葉の道に緒すれ痛む
新世帯炬燵小さくつゝましく
鶯をラジオに聞いて陸奥の春
猫一匹炬燵にまゐる眠むりをり
尺八の音は追分や春の雪
やりばなき目のゆく窓の寒雀
寒風に檢身を待つながさかな
マスクして我に寄り來る人を知らず
川寄りに代々紙を流く家のあり
元朝や女患ひそかにうす化粧
初便り我に過ぎたる見舞の書
柵焚いて政局論す父と子と
冬木立獵銃音の谷木魂
この果に君在りと思ふ雪明り
わが想ひ言葉とならず牙返る
退院の友見送りて秋晴るゝ
ひとりめの吐く息白く脈を見る
想ひ出は消えて悲しき寒降る
羽子板を負ひし子を背に父歸る

石巻 阿部 よし

宮城 佐々木 旭祥

集鴨 秦 一孔

二本松 宇多 鳥谷

仙台 熱海 はまほ

福島 若松 碧水

群馬 紺野 告天子

仙台 松野 大地

小野寺 以志

星高き夜空にひゞき聖歌隊
プレゼント贈りし友も病み居たり
休校や足あともなく雪積る
始業ベル雪たるまだけ残されて
行儀よく水下魚の干され軒並に
氷紋を見つめ炬燵に句をものす
病みつきて過去のあれこれ雪に恥す
病床に俳誌よむ手の悴める
轉勤の望み失せたり春の窓
チユリツブ盛られ大會宣せらる
虎落笛しみ／＼母と並び添ふ
霜の路何處までも母の足跡なり
大いなる初日迎えて静寂まる
急かれゆく水音へ梅や／＼ひらく
頬白鳴く子等は朝餉の箸を置く
柵を焚く兄のおもかげ父に似る
冬の鴉手術の肋骨斷ちきる音
療友自殺す
冬 薄陽 靈舎の壁に俳す
高島田足袋の白きの地に浮きて
年初め巨きく晴れし安達太郎嶺

菊地 時敏

石巻 澤田 直子

宮城 門 岡 楓

仙台 梅森 正之助

福島 松本 久三

海野 江露

福島 川島 たかし

宮城 西山 川月

群馬 富田 昌行

二本松 佐藤 清水

鐵塔のつゞく雪原涯もなし
會津大川にて
大川の一筋くねり雪の原
あるがまゝの形につも雪尺余
雪まだら鼻緒の縞のすじかひに
飲み残す茶に浮く塵や冬日ざし
拭き終えて福壽草咲く縁に居る
冬籠どちからともなく倦みぬ
どこやらに水の鳴りある枯野かな
バス大揺れに揺れ寒梅の宿に着く
霞ヶ城の石垣 高し雪景色
歸省して異郷のごとき夜霧かな
虫鳴けば讀經の僧は若かりし
大根の白きが眩し陽を受けて
短日を石工がきざむ文字太く
かくてわびし教理刻まれし冬の石
ふと合ひし瞳を埋火におとし
ラジオ劇佳境に入りし蜜柑むく
名曲は終りに近く窓に雪
新聞を見せ合うて雪の旅たのし
礎ヶ關にて

吉田 正明

渡邊 美津女

成田 實

大内 利螢

高橋 正實

丘 スミレ

藍原 てつを

水木 四幸

安達 紀恵子

市川 秋中

雪深き湯泉に旅の髪剃りぬ
雪の嶺かゞやきスキーつらなれる
泳ぐかに乙女のスキー山脈を
うそ寒や街行く人ら背をまろく
目路ひろき枯野のひかり療園に
寒夜更け戀愛を説く四十路の人
咳に和す咳のつゞくや良夜をも
母乳たらす児を抱き出でし月の下
このあたり芭蕉の遺蹟朝の雪
木の芽漬母に参らす里歸り
霧霽れ間千葉長崎と手旗せり
ストープにつかんゝと来て若き記者
風邪癒えて勤めてその日の穩かに
旅長き車窓に秋の蠅と馴染む
みちのくの驛の誘蛾燈まはたきぬ
波の音ひびき療舎の灯の寒し
小春日や病や、快き耳掃除
初霜にわが獨學の文字書きぬ
開病の日記の端に春の句を
夕風の雪吹きつけし給水塔
玻璃の雪風變りたるまゝ積もる
近よれる鶯見えす微熱の瞳

淡島 浪路
仙台 佐藤 芳藏
石巻 宮守 のぼる
石井 幸子
二本松 高松 祖堂
熊田 天平
市川 博中
新潟 濱本 梢
奈良 要海 楯作
新潟 本間 惠雪
群馬 飯塚 二郎

春の日や何を語らふ枝雀
小流れに障子を洗ふ日和かな
別離いま白き冷たき雪見つめ
感冒に臥して掌灯に透す
對岸の歌聲氷すべり來ぬ
出水や蟬鳴の翅の泥乾く
あかね燃ゆ雪嶺燦と我が窓に
賞を獲し大根供へて夫の靈に
愛憎を刻みつゝ二人して雪を
大根の山と船頭のみ波舟
落葉搔くわが音のみの山の晝
仲人の足しげく來る歳の暮
雪兎病む息の熱に崩るゝな
藤腰椅子に片手垂らして眠れる父
寒巴拉の濃き紅處女の唇おもふ
子に乳をふませ春を待つ心
海女黙し冬濤を見てゐたりけり
寒月に波の碎くる光かな
子ら寝ねし蚊帳のどこかに虫鳴けり
雪雲のひかりあるとき眼を射ぬる
冬暖や素足に硬き庭木履
琴に倦み遅日のひかりもてあます
初蝶や臥床の窓の明るさを
木々芽ぶき女工ら若き感傷を

二本松 宮山 正踏子
安齋 房子
安齋 志茂女
菅野 軍司
菅野 いわを
吉田 志津
吉田 六風
半澤 多計志
吉田 菊花子
常木 花子
菅野 愛子
中村 素人
柳木 田屋 青雲
柳木 井田 みき
大森 水紫
柳木 村雨 時を
柳木 ト部 春葉
柳木 佐藤 一耕
柳木 黒田 はるき
深井 晴記
茨城 青山 昭子
千葉 中村 三千夫
柳木 田代 睦子

あとがき

◎本號は二、三月合併號とした。そして四月號からはその月の初に出るようしたい。然し現在の如き電力事情では懸念がないでもないが……
◎主宰の「閑語句集」は青年時代の獄中日記の一片で、他誌からも再三發表を求められてゐた門外不出の原稿である當時の官界、政界、學界等々を忌憚なくやつつけてゐる縦横無盡の筆致は客氣が溢れてゐて味讀に價ひし、現今の民主主義萬能時代には想像も及ばぬ彈壓ぶりなどむしろ文獻として残るべきもので自信を以ておすゝめするものです。
従つて原稿が輻輳し主宰執筆の「同人月旦」や其他の有意義な投稿も次號に刺愛したから、御諒恕を願つておきたい。
◎復刊記念大會は遠方よりも御参加下さつたので、平に於ける空前のものとして誇るに足る盛會であつたことは、同信諸氏と共に喜びに堪えないことである。
今後にも更に々々、新らしい催しをして一層俳壇の爲に貢獻したい念願である。御

期待を乞ふ

◎別掲の如く「同人」を推舉した、本誌の刊行に積極的に協力下さる同信に對しては、今後も引つゞいて推薦することにとめたい。
理解ある作家諸氏は御加盟の程を切にお願する。尙編集所の近隣に居住される同人のうちから編集同人を依頼して直接本誌の續行に參畫していただくことにしたい。
(汀漱生)

石川桂郎著

【剃刀日誌】

創元社版
價八〇円

思白先生曰「志賀直哉の作品に接するやうな韻致の高いもので、俳人の中にもこのような作家があると思えば、俳句が第二藝術であつても一こう差支ない」と推奨してゐる。
因に本事務局代理部を通じての購入者には著者が署名して、宛名(購入者)も特に書いてくれることになつてゐる。
(土星編集事務局)

雜詠募集

土星集 八句、編集局選
締切 毎月二十日
用紙 土星集所定用紙
土星俳句會會員(送料共)
一ヶ月 五〇円
六ヶ月 三〇〇円
一ケ年 六〇〇円
◎但し結核療養者に限り二割引とする
送稿・送金先
平市仲町二〇(電話平一九三)
土星編輯局
(振替郡山一四〇八番)

土星 第九十六號

(本號に限り)
【價 六〇圓】

昭和廿八年三月五日印刷
昭和廿八年三月十日發行
編集人 安島 汀 淵
發行人 大井川 幸 隆
福島縣平市仲町二〇
發行所 土星俳句會

各地会報

汀 秋 選

遠灯新年句會

高萩篠生報

雪を歸る吾れに袖湯が沸いて居り
料亭のネオンに氷雨降りこぼれ
灯なき道の霜柱のみきらめきて
福壽草色見きわめて消燈す
初日の川松のみどりの幾久し
元朝やまこと静かな妻のさま
人なべてひとと過ぎゆく枯野道
羽根を遠く聞き居り戀を育てば
瓜見入る遊樂の夫置こたつ
炎はねて藤の實落ちぬ雪の天
遠汽笛多天に蒸氣消ゆるとき
春蘭の盆景おかれ多座敷
福壽草縁に置かれしまゝ留守
黄水仙閑寂の窓に思慕ふかし
歩をとめて見上ぐる寒の梅一枝
足袋の穴大きく今年の梅残る
年の暮農夫言なく今年火激る
霜柱土塊を支ふ雲の下
北風や乳房における手が小さし
霜柱われの靴音のみきしむ
女正月何を語るや窓の影
麥の芽のゆたかなる道娘ら歸る
背の兒の美しと指す寒の月

香雪 千枝子 松甫 砂丘 老紅女 香女 正子 盛吉 万里 里路

物言はぬ子なれば春着難はず
水を打つつるべの音や井蓋水
露灯に降る寒星の光り呀ゆ
寒月に夜廻りの柝牙えて来し
雪片まといレグホンの白道らばず
妹嫁して黙多ければ書架に對く
少女期に別るゝ手毬唄ひたに
蕨の葉はくるゝ見つゝ日々好日
枯草にきな臭きまで日溜りぬ
勿來句會

亞雀 好子 篠生 汀秋 思白

春立ちて野邊の息吹きに佇みぬ
立春の波ひとすじに光り来る
立春のふちのく風なほきびし
春立つ日妻とし幸を妻が語る
立春つや街中をゆくバス埃
立春の波の影あり松の幹
病床の母待ちにける春立つ日
立春の海坂大さ船航きぬ
立春の野山を覆ひて雲の層
春立つも悲戀の記事に寒さあり
春立ちて萬象何か愉しかり
重内炭礦句會

祐子 遊江 岳明 柳蛙 勿來 一空 愛子 良次 光惠子 皆川玉靖報

雪光りブラシ卿えし眼に痛く
早春の山には山の香りあり
早春の軒の雫とある一と日
早春の雪山窓をはるかにす
ミシシ踏む妹に子猫の眼が、
窓硝子陽にテラ、と擦固し
孤獨の思惟子猫に指をねぶらるゝ
早春の風かたけれど働く顔
早春やかつゝ廻る洗炭機
猫の子や坑夫で果つる家に飼はれ
古草に石眠るごとくいゝたり

青樹 稚月 玉靖 汀秋

軒灯はにぶく淡雪地に吸はら
寒明けや天に展れる河豚の腹
洋の線とざしつゝして春雪が
春の雪聲船沖多き日沖より来る
空トロ押す炭夫のかき春の歌
虎落笛止まず停電の夜を徹す
春の雪万象の生氣整えり
春の雪猪首かたむけ小走りに
空馬車の馬塞風にさらはらず
凍豆腐隣りも星もねむりたる
春の雪髪はらひつゝ友と語る
春の風邪酒宴のまどひ臥床まで
霜の枝月あがるらし空あかり
降りやまん春雪宙に降りまどふ
眞顔にて飼ひ犬養りす枯野の辻
早春の山の明暗かぶさり来る

正子 篠生 好子 松甫 千枝子 砂丘 思白 汀秋